
奏ヲ始メテ

如月睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奏テ始メテ

【Nコード】

N4248I

【作者名】

如月睦月

【あらすじ】

クラスの人気者安西奏。アンザイカナデ そんな彼女を中心にして少年少女が奏でる物語。孤独が友達だった少年。孤独が恋人だった少女。闘うことに特別な天才。人と人とのすれ違いは、やがては不協和音を奏で始める。

1 / 人気者の定義

「思ったけどさ。安西さんってどうしてそんなに無理してまで人気者でいたがる振りしてんの？」

出会ってから日を跨がずにそんな突飛な質問をぶつける様な自分は冒険者なのか。

勇気は無謀と紙一重。

大人になっていく過程で誰でもいつかは思い知ることなのに。

そのときの俺は気付いたらそうするしかなくなっていた。

まあ不幸中の幸はその少女が世間一般には捕らわれない広くて深い器の持ち主であるということに他ならなかった。

そうでなかったら俺等とうに拒絶されている。

意味不明な奴だ。とその後の人間関係の輪にすら入れて貰えない、そんな典型的拒絶を受けていたことだろう。

俺の問に彼女はこう返す。

「人気者ってどこからどこまでを言っのかしらね」

逆に質問し返された。

答えない理由はない。少し考えてみる。

「そう……だな。まず前提として友達が多いことが挙げられるか。そうでなければ人気者とは言えないしな。あとは誰からも好かれる性格の持ち主でなければならぬ。敵が味方を上回るようじゃ人気者としてそいつはまだまだだ」

軽い思考で浮かんできた考えを口にしてみた。

これで満足だろうか。

「それだけでは足りないわ」

反論された。

なら君の意見を聞こうじゃないか。さあどうぞ。

「人から魅力的だと思われる為にどれ程の努力が必要か考えてたことある？あの人カッコイイ。とかあの娘カワイイとか言われるような人はそれに見合う努力を積み重ねているものよ。たまにいるじゃない？本人は分かってなくても周りに煙たがられてしまうタイプの人間が。そうゆうのはね、やり方が悪いのよ。そうゆうのは気付かないから最悪なの」

なら君は気付いているから魅力的なのか。

周囲の目を惹き付ける力を持っているのか。だから人気者なのか。

「へえ。面白い視点だ。それはいい。けどさっきの質問の答がまだだよ。誤魔化してほしくはないからな」

俺は答えたのに君が答えないなんて許さない。

「ふん。質問に質問を巻き込んでなかったことにしようと思ったのに」

そんな作戦が通じるか。

逃げられはしないのだから。逃がしはしないのだから。

「集団の中心にいるとき。自分が独りじゃないって思う気がするから。その思い違いが心地良くてやめられなくて抜け出せなくなったから……ていつたらどうかかな？」

そんないい加減な理由で人は自分を偽れるのだろうか。自分を偽り他人を騙し、

得られるものを天秤に掛けて、その結果が今の彼女を築いているのかもしれない。

そうゆう人間がいなくても限らない。

世界はどうしようもなく広いんだな。広いからどうした。

「なんてね。言ってみただけだけど。本当のところは私だつて半信半疑なんだよね。いつの間にかこうでした。わざわざ修正するのも面倒だからこのままなのよ悪い？」

悪くないと思う。誰だって同じだ誰でもそう。

自分の境遇にいちいち疑問を挟んでなんかいられない。

そんな暇ないって。人間なのさ。

「じゃあそんな安西さんとこれからもお付き合いさせて頂けたら光栄ですよ」

美少女と然り気無く交友関係を促す。

綺麗な人とはお近づきになっておきたいからな。

高三に進級してのクラス替え後の放課後の出来事だった。

「ええ。こちらこそよろしくね」

2 / 曇り後晴れ

俺と安西さんがその後どうしたかといえば、まあ取り敢えずの友好関係を結んだ後俺から帰りますか。と提案。

親睦を深める意味でも何処かへ寄り道してもいい。

彼女にそう持ち掛けるとあっさり承諾してきた。

ガードが固そうに見えて実はそうでもないのかも。

第一印象とのギャップを見付けていくのが面白い。安西奏という人間がベールを脱いでいくように。

「君小説とか読んだりする人？」

とっさに聞かれた。俺の中身を安西さんも知りたがっている。

お互いに知り合おう。それでこそ知り合いになれる。そんな気がした。

「小説？生憎だけど、活字を長時間見続けられない人なんだ俺」
正直に告白。

ここで嘘ついて自分を良く見せても俺は気持ち良くない。

後腐れが残るそれ以外には何も無い。安西さんとの人間関係を100%楽しめないと思う。

だからそのままに、有りのままを答えた。

意外そうな顔をされてしまった。

「へえ。君って電車に乗ってる時間にポケットから文庫本出して暇潰す人っぽかったから。……それは意外」

そういわれましても……。こちらとしてはどうしようもないのである。

趣味趣向は人それぞれでいい。人それぞれだからこそいろんな人間がいる。それが普通。

「俺ってそう見える？言われたことないけど」

言ってくれる友達とかもないけど。

だからこそ安西さんとの関係には意味があると思う。新発見の連続だ。

意を決して話し掛けた甲斐があるというもの。

「見えるね。折角なんだから、ホントに読む人になればいいよ。私も友達に薦められてから気付いたけど読書は良いよ。自分が高尚な人間かのように錯覚できるからね。例えばさあ、図書館でオシトヤかに本読んできるとさ周りの大人達は思うんだよ。なんて勉強熱心な模範的な学生なんだろうってね。案外良い気分になれるよ。そんな優越に浸れるだけで。優越感を感じられるだけでその価値はあると私は思うね。どうかな？私を少しは見損なったかな？」

意外なのは君の方じゃないのか。

誰からも好かれて友達も多い、人気者になる為の努力を人一倍積み重ねている彼女からそんな言葉がでるなんて。

たまには気を許したくなるときもあるのかもしれない。俺の前でそれをしてくれたのには素直に嬉しい。

俺以外の人には見せたくない優越感。欲望に忠実な優越感。

なんて図々しいのだろう。俺はまた一つ自分を嫌いになってみた。

「うーん。何度か試してみたことはあるんだけど。途中で何もかもどうでもよくなつて、続かないんだよ。文字の厚みが意識を揺さぶってくる感じ?とにかく耐えられない」

「まあ向き不向きはあるからね」

俺には向いていなくても彼女には合っているのだろう。彼女が持つていて俺にはないもの。

羨ましいわけじゃ別になく、割りきれているならそれは気にはならない。俺は平気で容赦なく割りきれる。

駅前の喫茶店に二人で入店し、些細な会話を交えている。

女子高生と一緒にこんな風にお喋りができるとは思っていなかった。

それもあの安西奏とだけ。誇りに思っているいい筈だ。

どんな形でさえ彼女と二人きり。邪魔者もない。

二人だけで語り合っている。そのことを深く感じようとする。

「何よ。黙っちゃって。何か話題ふってよ。退屈するでしょ」

膨れっ面の彼女を見つめているのは俺だけなんだよな。すごくね？

「じゃあ定番・・・かどうかわかんないけど、恋人とかいるのか？」

真剣に全力でどうなんだ？

必死になっている俺。誰とでも親友のように接する彼女には特別な人がいるのか？

彼女にとっての唯一無二が。

「もう訊いちゃうんだ。そんなこと」

「・・・。」

不味かったのか？知り合って間もないのにあまりにも踏み込み過ぎたのか？

「まあ。いないんだけどね」

いないらしい。

それはつまり・・・今よりも歩み寄っても構わないということか。これ以上近付いてもいいってことか？

試されているような意思表示。始まったばかりの高校生活最後の一

年をどんな思いで彼女と付き合っていていけばいいんだ？

友人関係か。それとも……。

彼女の特別になれるのなら何だってする。

彼女にとっての唯一無二になれるのなら、彼女の全てを手に入れられるのなら、喜んで俺の全てを差し出そう。

大したものは持ってないけども。彼女に全てを委ねて、それから……。

彼女が、頼んだカフェオレをストローで吸うと、困惑しているような表情で言う。

「いないけれど……、私は君がどんな人間性を持っているのか知りたいから、今はまだそれは待って欲しいな。私と君が出会ったのはついさっきのことなんだしさ。私達はお互いの外見だけをみてそんな軽はずみな決定を下しちゃダメだよ。そんなのきつと続かない。続かないよ」

今はまだやめようよ。そんな話。

俺は自分が恥ずかしくなった。

何も考えずに衝動的に一気に距離を縮めようとした俺に彼女は釘を刺したのだ。

そんなのダメだよと。二人の絆が薄くなると。分かった。

俺は考えを改めて、もう一度彼女に問い掛ける。

「悪い。俺は間違ってた。そこまで考えがいかなかった。安西さんがあまりにも眩しくて色んなこと忘れてた。許して欲しい。俺はそんな中身を自慢できるような人間ではないつもりだけど、そんな俺で良かったらこれからも一緒にいさせてくれないか？俺も安西さんの人間性が知りたいんだ。」

素直になって、気持ち偽らずに有りのままをさらけ出した。

これが結構勇気のいる行為だった初めて知った。

俺はまたひとつ自分を好きになってみた。

「分かったよ。これからも宜しくね。こんな私でよければ、いくらでも教えてあげる。でも眩しいってのはちょっと照れるかな？」

「……………ごめん。なんか俺恥ずかしいこと言ってた？今は全部忘れて……………」

急に恥ずかしくなってきた。やべえ俺今何て言った。メチャクチャ痛くないか今の俺。最悪だ。

「そんなことないよ。カツコよかったよ。今のは私の心のノートに書き留めてお墓まで持っていくことにしよう」と

「やめてくれ。頼むからそれだけはやめろ。できれば忘れてくれな
いか。」

「もう遅いよ。この耳でちゃんと聞いちゃったもん。残念でした。」

からかわれている。けれどそんな馴れ馴れしいやり取りができる関係が始まったってことだろう。

「あとさ。安西さんってゆうのはやめない？なんかしっくりこないからさ。私のことは安西と呼び捨てにして欲しいな」

ああ名字ね。いきなり呼び捨てとか言われて動揺したけど名字を呼び捨てってさん付けとどっちが親しい感じなんだ？

近付いてるのか、離れているのか。

「じゃあ安西……明日また会ったら今日みたいに話し掛けていいか？」間を置かず彼女はこう返す。

「どうぞ。また教室で待ってます」

今日は良い日だ。天気も快晴。曇り後晴れ。見透しは良好。

3 / 一人ふえて三人

朝日に包まれた教室。静寂の中を一人扉に手を掛けた。

誰もいない教室がそこにあるのを願って。

その願いはあっさりと裏切られることとなった。

何故なら、二人の女子生徒が窓際の席から俺の姿を見て驚いているのが見えてきたからだ。

二人の女子生徒の内一人は昨日すでに知り合った安西奏であるが、もう一人は知らない顔だった。

クラスメイトだとは思う。

「あ、おはよ。君だったんだ。早いね」

「おはよう。……えと」

戸惑う俺に安西がフォローを入れる。

「ああ。二人はお互いに初めてだね。この人は神田さんだよ。名前くらいは知ってるかな？えとこっちは……」

俺のファミリネームをたった今名を知ったばかりの女子に教えている。

彼女は俺を見たがあまり興味はないようだ。

「・・・・・・・・・・そう」

とだけ。

安西に話し掛けられているのも本意ではないようで、誰とでも仲良くなれる彼女だからこそ許されているみたいだ。

「じゃあ今日からこの3人で朝はお話タイムだね。二人とも仲良くしないとね」

そんなこと言われたって。どう見ても相性の良い相手だとは思えない。クールで言葉少なめな印象。

ただそうだな。美人だ。可愛いというよりは綺麗と称すべきだろう。

そうゆう意味では親交を深めるにやぶさかではないが、向こうは明らかにその気がない。どうでもいいという感じだ。

「取り敢えずこの3人が仲良しメンバーだよ。これからよろしくね二人ともっ」

勝手に入れられてしまった。図らずもメンバー入りを果たしていた。

でも正直両手に花のメンバー構成では不満はなかったりする。思春期男子の性である。顔に出ていないか気を付けないと。

「ええ・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・。神田って呼び捨てにしても・・・・・・・・・・?」

「どっぞ・・・・・・・・・・」

やはり相性最悪だ。おいおいミスマッチにも程があるんじゃないか……

「うんまた一つここに新たな友情が芽生えたね」

「おい何言って……」

「いいんだよ。友情にだって色々な形があるんだからだからそれはいくらなんでも強引すぎるって。」

そんなこと言い始めたら世界中の人類みんな友達になってしまうだろう。

頭で違うことを考えながら神田の表情をちらつと伺ってみる。

綺麗に整った輪郭に黒髪のロングヘア。ショートカットの安西とは対照的だが二人とも共通していることはやはりどうか何というか、美少女。

生まれながらにして容姿に恵まれた誰もが羨む美貌の持ち主。同性には妬まれ、異性には求められる少女達。

そんな二人と早くもお知り合いになってしまった。なんだか出来すぎているような……

「よし。じゃあ放課後はこの3人でどっか遊びに行こうか？3人の友情を誓ってさ」

友情もなにも。お前が辛うじて繋ぎとめているだけの今にも崩れそ

うな二等辺三角形じゃないか。

彼女が居づらそうな顔しているのを分かった上で言ってるのか？

俺と神田は普通なら当たり前のように関わり合いになることは無かった筈の存在同士だったのに。

それをお前が強引に引き合わせたんだぜ。その落とし前は、責任はどう取るつもりなんだ。

「俺は構わないけれど……。。。神田？」

恐る恐る確認をとる。本人の意見を訊かないことには話は始まらない。

安西は周りが見えてないようだし、俺が何とかするしか……。。。

「勝手にすれば……。。。」

というこらしい。

「やったあやったあ。じゃあ決まりねっ。どこ行こっか？私考えとくね。楽しみだなあ。今からテンション上がったっしょ」

この面子でどうテンション上がれって言っんだ。

本当にこいつは宇宙人とも友達になってくるんじゃないか？

「まあでも確かに……。。。」

本日はまだ始業式翌日。よって授業等はまだ始まっておらず、今日もクラス内での取り決めやら何やらで午前で終了する。

それなら暇をもてあますこともない。この二人に付き合うのも悪くないか。

「それも悪くないか」

「悪くない悪くない。ていうか大喜びするべきじゃないの？二人も美少女侍らせてお出かけするんだからねっ。ニクいなこのっ」

こいつは自分の容姿や言動が周囲にどんな影響を与えるか分かっているタイプの人間だった。

そうゆうのが一番敵に回したくないが味方なら話は別。

一緒にいてこんなに飽きない奴はお前くらいだよ安西奏。

お前に出逢えたのが俺の中で唯一自慢できることだよ。

他の誰でもない安西奏という名の少女。誰にでも笑顔で笑顔にしてしまう彼女。そんな少女を好きになった俺。

今はただ続いて欲しいだけだ。こんなたわいもない日々が。一秒でも長く。

それが例え希望的観測だったとしても。別に構わない。

「そんなんじゃない。俺はわざわざおまえらに付き合っただけで……」

そんなバレバレな偽りの誤魔化しを照れ隠しにして。

「照れなくていいって。ホントは嬉しいくせに」

「うるさい。やっぱ帰る。お前ら二人でどこへでも行ってる。俺はもう知らん」

「そんなこといわないでよ。拗ねちゃってカワイイなあもう」

「本当に帰るからなっ」

こんなにも素直で率直でいて真っ直ぐな会話を最後にしたのはいいだったか。

思い出せない位の過去の記憶はきっと思い出しても虚しくなるだけだ。

なら今だ。今から、最初から作り直すんだ。

思い出なんていくらでも修正がきくのだから。失敗することを恐れずにやってみよう。

「……………あなた達はどっという関係なの？」

ここまでずっと消極的だった神田の口から出た言葉だった。

「……………どうゆづつていわれるとかえって答えづらいけど……………まあ友達だ」

「ずっと友達かどうかは分からないけどねっ」

「い、いやそんなんじゃない………」

突然の不意討ちに動揺させられてしまう。

「あれ？何テンパってるの？なんか勘違いしてないかな？ん？」

畏だ。悔しい。なんか負けた気がするっ。

「私は邪魔なんじゃないの……？」

遠慮するような口調なのはつまり俺達に気がつかっているつもりらしい。空気を読んだつもりらしい。

「でもまだ私達は友達からは抜け出せないのですっ。なぜなら……」

「ここは彼女に任せるとしよう。」

「まだ友達でいたいからだよ」

俺は違う。俺はお前と友達のままは嫌だ。いやだ。イヤだ。

けれど彼女がそうしたいという意志を尊重したいと思う。友達だ。俺と安西は。

「そういうことだから暫くはよろしく頼むよ。俺と安西奏をさ。仲良くしてやってくれ」

1人加わって3人。この奇妙な関係に1人増えて、それもかなりの癖者である。

さてどうなることやら。

前途は多難だがそんな回り道もたまには良いか。

選択肢のない一本道を無難に進んでいったってつまらないだろ。そうだ。

俺は心の何処かでこんなことが起きればいって思っていたんだ。

世の中の大多数の人間と似たような人生で妥協するのは嫌だった。そしたらどうだ？

何処かの誰かが願いを叶えてくれやがった。

この現状を打開するラッキীগールを二人もプレゼントしてくれた。

これで面白くならない方が可笑しいって。

片やクラスの人気者。世界の誰とでも仲良くなれると思っ込んでいる少女安西奏。

片や未だ正体不明の謎の美少女。神田という名の少女。

この3人でこれから一体どんな物語を奏でるのか今から楽しみだ。

けどこいつらには教えてやらない。言ったら付け上がるからな。

特にショートカットの方は。

「・・・・・・・・」

無言で顔を逸らされた。けど多分肯定の意思表示だ。

何となく分かってきた。

多分こいつとも俺は分かり合える。結局は似た者同士だからな。

そついう空気を彼女から感じられる。ならこいつとも俺は知り合つことができるだろう。

いつか俺にその凍りついた表情の内側にある筈の可愛らしく笑った顔を見つけてやるから覚悟しろ。

「これで私達はいつでもお互いに助け合わなきゃいけないからね。それだけ忘れないで欲しいな」

安西がそつ付け加えた。

それはつまり安西が作った、お互いが友達でいる為のルールということか。

それだけは忘れないで欲しい。 違えないで欲しい。

そこを間違えてしまえばそれはただ形だけの付き合いになってしまふ。

そんなのきつとつまらない。

そんなのはきつと続かない。

だからこれだけは確認しておかなければならなかった。絆が薄くならないために。

「心配すんな。この中の誰か1人がどうしようもなく追い詰められて、どうしようもなくなったらきつと後の2人が手を差し伸べる。約束する」

「……………ええ」

無愛想な性格なりにしつかりとした意思表示を彼女もしてくれた。

これでようやく改めて3人の人間関係が始まったのだ。

後はなるようになれか。

「ずっと一緒だからね」

でも……………。それでも俺は……………。
いつかはお前と一緒にいたくなるかもしれないぞ。そしたら彼女の居場所はどつするんだ？

ようやくできた彼女の居場所をいつかは俺が奪わなければいけない
つてのか？

それは嫌だ。けどもこのまま3人のままも嫌だ。

イヤダイヤダイヤダって俺は子供か。まったくいい加減に成長しろ
よ。

自分に嫌気がさしてきたが今はそれさえもどうでも良い。

早朝の静けさに包まれた教室はようやく喧騒に変わる。

異色トリオが教室を占領しているのを目の当たりにした他のクラスメートは最初異様なものでも見るような顔をしたが、すぐに安西が

「オハヨウ」というと柔和な表情に変わって快く挨拶を返してきた。

俺はというと無用に注目を集めたくはなかったので彼女らとは離れ1人廊下側一番後ろの自分の席へ戻り机に身体を預けて目を閉じる。

さっきまでのやり取りを頭の中で反芻していた。

俺らしくないことをした。

まあたまには回り道も悪くはない。

なんにしても1人ふえて3人。

友達がふえてるのは悪い気はしないものだな。

4 / 二人の孤独

安西奏が友達をつくる才能の持ち主なら俺にはその才能が欠けているのだろう。

そしてどうやらそれは神田も同じらしい。

自分から誰かとの繋がりを必要とせず、そもそも人との接し方が分らない。

要は孤独と友達なのだった。

誰かと誰かの繋がりをみて自分も欲しいとは思わないしそうすることができない自分を嘆いたりすることもない。

悪循環のスパイラルに捕まっていることにすら気が付かない。

典型的な社会不適合者。

明らかな疎外や嫌がらせを受けている訳ではないがお互いに無関心が当たり前に日常化してしまっている。

心の中で一人で泣いていても誰も助けてくれない。

筈だった。

安西奏が変えた。

俺達のそんな閉塞的状况を劇的に颯爽と現れた少女が一変させた。

それは例え彼女にとっての自己満足だったとしても俺達の、少なくとも俺にとっては救いの手だったことは言うまでもない。

既に日も落ちた空。

人影のない道を駅へと向かって行く隣で一緒に歩を進めているのは神田だった。安西はいない。

彼女とは方向が違うので途中で別れた。

二人きりだ。お互いに言葉は交わさない。

3人で遊びに行った後の帰路だった。

同じ交通機関を使用していた俺達は帰り道を共にしている。

俺達3人は事前に予定してあったようにどこかに遊びに行くことになった。

予定とはいつでも今朝早急に立てたものだが。

駅前のゲーセン行ったり、デパートでショッピングに付き合わされたりした。正直疲れた。

それにしても彼女達はその様子がなかった。女は買い物では疲れない特性がデフォルトで備わっているともいうのか。

あいつらお揃いでアクセとか買ってたし。安西が半ば強引にだけれど。

「今日はどうだった？安西と一緒にいる時間ってのはどうだ？案外悪くないだろう？」

いつの間にか話し掛けていた。沈黙に耐えられず痺れをきらせてしまったのだ。

「・・・少しは

無表情の中に微妙な変化が見えた気がしたのは俺の気のせいだろうか。

気のせいじゃなかったら良い。

「そっか・・・」

「でも・・・」

彼女は続ける。

「どんなに彼女の近くにいたって私達は彼女のようににはなれないわ」

私達は・・・か。

どうやら彼女は俺と自分を安西と分けて考えているようだった。

どうしようもなくそこには差があるのだった。

俺と神田。

安西奏。

違う者同士の奇妙な関係。

いつまで続くかも分からない明日にも無かったことになるかもしれない関係。

それでも俺達はそんな今にも消えそうな限り無くか細い繋がりを保つことに躍起になっている。

それに意味があるかどうかは最早どうでもいい。意味なんて無くても良い。

俺達が望んだことなのだから。

そこにわざとらしい意味を求めること自体が間違っているのだ。

27

「それで良いんじゃないか」

「・・・何故？」

「安西だって俺達にそこまでを望んでいるわけじゃないさ。そうじゃなくて。ただ友達になりたかっただけなんだよ。あいつはそうゆう奴だ」

なんて言ってみた。

「私にはそうかもしれないけど、君には違つてしょ」

「なんで・・・？」

分かっているながらも問い掛ける。

「好きなんですよ？君は彼女を彼女は君を」

それは今言っただけのことなのだろうか。

今それをはっきりさせてこれから3人はうまくやっていけるだろうか。

そんな歪んだ三角形でこれからも。

「さあね。分からないよ」

誤魔化して結論を先延ばしにしてもいつかは答を出さなきゃいけない。いつまでもなかったことにはできない。

「私に遠慮してるなら、別に気にしなくていいよ。また1人に戻るのも悪くないから」

俺は彼女と似た者同士だ。

だからその言葉を彼女がどんな思いで口にしたのか痛い程分かる。分かり過ぎる。

だからそんな思う必要の無いことを彼女の脳裏から消す為にそんなことをしたんだと思う。

少しは下心もありました。

「・・・？」

彼女の手を握っていた。

その綺麗で真っ白な手を。彼女の細い指に自分の指を絡めてやった。当然のように彼女は戸惑う。

「何してんの？する相手間違ってる？彼女に愛想尽かされるわよ」

「・・・じゃあこれで三角形関係だな。もうお前も無関係じゃない。・・・1人に戻るのが悪くないとかいうな。そんな筈ないんだよ。お前は分かかってないんだよ。1人が寂しくないわけないんだよ。もうそんなこと言わなくていい。俺と安西はそんなこと気にしない。だから俺達はこれからも3人だ」

息継ぎせずに言い切った。それだけは伝えたかった。知っていて欲しかった。

絡める指にギュッと少し力を込めて。細くても力強い指だった。

「・・・それはわかったけど、いつ迄握っているつもり？いつの間にか恋人繋ぎになってるし」

よく見たらそうだった。否、狙ってやったというべきだろう。

日が落ちているとはいえ駅前の繁華街の道は人影が疎らに確認でき

る。

こいつ少しは恥ずかしがるかな？と思ってやった。

「痛っ……」

繋いでない方の手が伸びてきて俺のおでこにデコピンした。

咄嗟の出来事に気をとられその隙に彼女は絡められた指をほどく。

「こづゆづことは彼女にしてあげなさい。私にしてどうするの」

ほどいた自分の指を見つめながら切ない声で彼女はそう言った。

その顔に動揺は見られない。つまんねえの。

「……あなたには私は嘘はつけないのね」

「お前が思ってることは俺が思ってることだからな」

だからもう俺達の前で嘘をつく必要はない。そのままのお前でいればそれでいい。

「似た者同士これからも仲良くしようぜ。神田……。下の名前教えてくれよ」

彼女のファーストネームをまだ知らないことに気が付いた。

「……安住。安全の安に住むと書いてアズミ。変な名前でしょ。」

「そうか？そんなことないだろ。神田安住。カンドアズミ。格好良い名前じゃないか。何処かのドラマのヒロインみたいで」

「アンザイカナデには負けるわよ。彼女をヒロインにした小説を書きたいくらい」

それは俺も同感。彼女の名前を知ったときなんてネーミングセンス良いんだろうと思った。

彼女が自分で付けた訳じゃないからこの場合褒めるべきは彼女の両親だけだ。

「あれ。神田って小説とか読む人なのか？」

彼女の言葉の一つに引っ掛かって疑問が浮上。

「ええ。まあ。たしなむ位には」

そう言ってブレザーのポケットから文庫本を取り出して摘まんで見せてきた。

「じゃあもしかして自分で何か書いたりとか？」

「いや。読むだけ。私にそんな才能は無いわよ。書きたいとも思わないし」

才能の有る無いじゃないと思うけど。

「まあ。ならあいつと話が合うじゃん。安西。最近読むようになったって言ってたぞ」

「そう。それは楽しみね。ならあなたも読んでみる？」

掴まんでいる文庫本を開いて見せてきた。こっちにページを向けてその拍子に挟んでいただろう栞が地面に落ちる。

「あつ……。どこどこ？暗くてよく見えない」

街灯の少ない道に入っていたので何処に落ちているか分かりづらい。というかこいつでも慌てることがあるのか。

意外だ。余程大切にしていた栞らしい。

いつも顔に無表情を張り付けている彼女のそんな様子はギャップがあつてとてつもなく可愛いかった。

仕方なく俺も地面を注意深く観察する。

幸いキラリと光るアルミ製の綺麗な模様の入った栞がすぐに俺の目に飛び込んできた。

彼女はまだ気付かない様子。ちょっと悪戯してみたくなくなった。

「あれ？どこいったんだ？こっちにはないな」

「そんな……」

彼女は本気で泣きそうな顔になっていた。おいおいたかが栞にそこ

まで……。

「嘘。ほら」

握っていた指を開けて見せる。

それを見た彼女の顔といたら、それはもう綺麗で美しかった。

見とれてしまう。彼女の指を開いて頬を握らせてやる。

「意地悪……」

そんな顔するなって。好きになっただらどうするんだ。

「悪い悪い。神田のそんな顔見れて良かった。可愛いとこあんじゃん」

「うるさい……」

その後は二人共無言。駅について別々の方向の電車に乗るまで、そこで「また明日」「さよなら」だけ。

帰りの電車の心地良い揺れを一人感じながら神田安住のことを考えた。

誰にも心を開かない彼女。

俺と似た者同士の彼女。

そんな彼女のことを今日少し知れた気がする。明日また少し知れた

ら良い。

そしていつかは全部分かってあげられたらもっと良い。

そんなことを思いながら心地良い揺れは続く。

ガタンゴトンガタンゴトン

5 / 今迄と違う朝

何か悪い夢を見ていた気がする。

感情のこもらない機械音が部屋中に鳴り響く。

ピピピピ。

肌寒い朝の寝起きは布団を手放したくない。

それでもいつまでもそうしてはられない。

この家には自分を朝起こしてくれる人はいないのだから。だから仕方無しに諦めた。

ベッドから飛び立ち窓を開け冬の寒さをまだ残した春の朝の空気を
感じる。

寒い。

すぐに閉める。でも目は覚めた。

寝間着代わりのスウェットから学校へ向かう為のブレザーに着替える。

今日はいつもより寒いから中にセーターを着て行く。

春休みの間封印していたセーターをタンスの奥から掘り起こし着用。
うん暖かい。

これで学校までもつだろうか。

起こしてくれる人がいないということは朝食の用意をしてくれる人もお弁当の献立を考える人もいないということ。

全て自分でやらなければならないことにはもう慣れたからいいけど。

昨日は疲れたから良く眠れた。

俺を散々振り回してくれた彼女達も今頃はベッドから出なければならぬ現実と闘っているのかと思うと少し面白い。

神田は血圧低そうだな。朝は不機嫌そうだな。

安西は逆に目が覚めたその瞬間からいつものテンションだろうな。そしてそのテンションを夜ベッドに入る迄保つんだらう。

我ながら愉快的な想像で遊んでいた。

寝室のドアをゆっくりと開けると、そこも冷たい世界だった。

人の温もりを感じられないからでもあるかもしれない。

リビングを通り過ぎるついでに沈黙を紛らす為リモコンで液晶テレビの電源を入れる。

興味もないニュース番組でキャスターが淡々と朝の報道をしていた。

昨日のスポーツの結果。

何処かの外国で起きたという大地震の現在の状況。

国会議事堂で政治家達が拍手している。内容も知らない法案が可決されたからみたいだ。その法案を巡ってテレビの中で評論家達が意見をぶつけている。

それはただ通り過ぎて行く景色のように。

俺の記憶には残らない。

冷蔵庫から卵を取り出してフライパンを温める。

今日から授業が始まるのが憂鬱だ。

そう言えば彼女達はお弁当とか自分で作ったりするのだろうか？

・・・ダメだ。何かさつきからあの二人のことばかり頭に浮かんでくる。

そんなに急がなくてももうすぐにでも会うことになるだろうに。

教室のドアを開ければそこにいるのだろうから。逃げたりはしない。

俺の方から逃げたりしない限りは。

下らない思考で頭の中を埋めながら黙々と料理する。

いつからだろう。自分の為に仕方なくそうするようになったのは。

いつからだろう。

機械音に慣れてしまったことに違和感を感じられなくなったのは。

一人には広すぎる高級マンションで毎日一人で寝て一人で起きる生活を、なし崩し的にしている自分はこの世界しか知らない。

自分と同年代の少年少女が家庭では何をしているのか分からない。

中学生になったときからこうだった。

毎月の生活費だけが銀行口座に振り込まれる毎日。機械的に同じことを、同じ日々を繰り返す毎日。

毎日が昨日と変わらなすぎて明日がやって来る気がなかった。

けれど今は違う。

俺も半信半疑だった。

どうして彼女に話し掛けたのかももう思い出せない。

クラスのHRが終了し、教室で一人机に向かう彼女にどうして話し掛けたのだろう。

助けて欲しかったのだろうか？

クラス替え直後にも関わらずクラス中の男女から慕われていた彼女に。

彼女なら自分を助けられると。

そんな自分勝手な想いを押し付ける俺は自分では何もできない。

だから孤独は嫌いだけど孤独は俺のことを好きみたいだ。

俺にも好きな人ができれば孤独も諦めてくれるだろうか？

軽い朝食をつくり学校に持っていく弁当をつくる。

とは言っても昨日の残り物を詰め合わせるだけ。手抜きではなく合理的にだ

。俺に料理とかを教えてくれる人はいなかったので独学であれこれ試してみた結果、俺には料理の才能があるらしい。

レシピ等見なくてもその料理を一番美味しくすることができる方法が分かってしまうのだ。

小学校の家庭科の授業でみんなに驚かれた経験がある。

担任教師も感心というよりは驚愕していた。

「君は料理が上手なんだね。凄いね。将来コックさんになるのかな？」

絶対嫌だ。

名も知らない他人に一生料理を作り続けるなんて地獄だ。

作り続けなければならぬなんて地獄だ。

それならもう二度と料理なんかするもんかと思った。

でも今は仕方無く自分の為に行っている。

自分で作った料理を食べていると孤独をより強く感じる。

この味はいつもの味。この味もだ。もう飽きた。もう嫌だ。

自分の為だけに一生料理し続ける方が地獄だった。

料理なんて出来なければ良かった。

出来なければ諦められるのに。

諦めて全て曖昧にしてしまえるのに。

出来てしまったばかりに俺は苦しんだ。

料理をして喜ばせる相手のいない俺はただ虚しいだけだった。

けれどそれならそしたらそうだ。

今度彼女達を我が家に招待してみるのもいいかもしれない。

二人共呼べば変な誤解をされることもないだろう。そして手料理を振る舞ってやるのだ。

あの二人はどう思うだろうか？

朝食を食べ終え、簡単に後片付けをしテレビの電源を消して家を後にする。と思ったのだが、非常に寒い。

もう一度中に戻ってマフラーを巻いていく。

全く、春はいつ迄寝坊しているつもりなのだろう。

まだ人気のないマンションの廊下を進みながら思う。

ああ。ストーブの効いた教室が待ち遠しい。

二人のいる教室が。

エレベーターのボタンを押した。

6 / 知ることは辛いこと

あまりの寒さにまるで凍り付いているかのように静まり返っている校舎。

それでもこのドアを開けばいる筈だ。

逆に静けさが恋しくなる程のハイテンション女が。そして朝は不機嫌なローテンション少女も。勢い良く開く。

そうしたら予想が外れた。

それにしてもこのドアを開く度に予想を裏切られているような気がする。

安西が自分の机に突っ伏していた。だが神田の姿が見えない。

あいつ毎日早起きしている訳ではないのか？

それともやはり朝は苦手なのか。

安西の背後に音を立てずに忍び寄り彼女の背中を叩く。

「おいおい。あいつどうした。神田。やっぱり朝は弱いのかあいつ

「うわっ。ビックリした。なんだ君か。ていうかやっぱりってなに？」

不味い不味い。想像の一部が漏れだしている。

「いや・・・なんでも。お前一人か。神田もいると思ってたからさ」

安西と二人きりになるとは思っていなかったので心の準備がまだ出ていない。

お互いに次の言葉が出てこない。沈黙を沈黙で上書きするように。

「そつか。もうすぐ来るかもね。別に強制はしてないんだから仕方ないよ」

いやもしかしたらわざとかもしれない。

俺と安西を二人きりにしてやろうと、あいつなりに気を使ったということなのかもしれない。

「そうだな。来るかどうかはあいつの自由だったな」

嫌でも何かを期待してしまう。急激にペースを上げる心臓の鼓動。

その一つ一つが苦しい。それ以上俺を見ないでくれ。

「きつと来るよ。今にもその扉を開けてさ」

今は来なくて良い。もう少しこのままで。

安西の時間を独占したい。

自分以外の誰にも渡したくない。

永遠にこの教室に誰も来なくてもいい。

俺は近くにあった机の椅子を引き抜いて彼女のと向かい合うように座る。

「安西。いつまでだ？いつまでこの関係 continuer んだ？俺とお前はいつまでこのままなんだ？」

俺は彼女を我慢できなくて気持ちを押さえつけられなくなって思っていることが口をついて出た。

格好悪い言い方だ。

けどそんなことが気にならない位今の俺は盲目だった。

「慌てない慌てない。私はまだあなたのことを半分の半分も分かってない。

この前も言ったよね？

そんなんで無理矢理にしてもきつと上手くないよ。

君はもっとクールな人かと思ってたけど、そうじゃないことを今知った。

また一つ君を知れて良かったよ。今何もかも強引にしまったらそれすらもつ出来なくなるんだよ。

お互いのことをちゃんと分かってないでお互いに唯一無二だなんて辛すぎるよ。

そんなの私は耐えられない。それに耐えなきゃならない関係なんておかしいよ」

もう一度突き放された。この前と同じようにこの前より強く。

彼女は自分の考えを覆す気は全くないようだった。

徹底しているな。

そこが彼女の彼女たる由縁だろう。

人との人間関係に容赦はしない。そこに情を挟んで曖昧にしてしまうことは決してない。

何処までも徹底している。

多分そういうところを全部ひっくりくるめて好きになったのだろうけど。

今はそれが少し邪魔。何でだよ。

どうしてそんなにも時間をかけたがる。

お前がどうしたいのか分からない。

「・・・悪い。俺のこと見損なつた？俺のことを知って、俺がどういう奴なのか分かって、それで愛想尽かしたか？」

「ううん。そんなんじゃないよ。君のそんなところが良いんだよ。優しすぎるのもつまらないじゃん。もっとお互いをぶつけ合わないとお互いを知れないからさ。今はこれでいいの。もっと私に君を見せて」

彼女の指が俺の顔を目指して伸びてくる。

今度はデコピンじゃなかった。

俺の唇を塞ぐように添える。

俺はそれ以上何も言うことは出来なくなる。

彼女の仕草一つ一つは誰も邪魔できない空気を纏っている。

まあそうじゃなきゃ彼女は彼女ではなかっただろうが。

「今はまだダメだよ。もう少し待って。君のことを本当に特別にできる準備が整うのを待って」

「・・・」

彼女の作り出した空気は俺の反論を拒絶する。

俺の反撃を許さない。自分と俺との間に一線を引く。

俺からは踏み込めない断ち切れない線を。

俺は無言で頷くしかなかった。

俺の唇に添えられた指が離された。彼女は微笑む。

天使のようなはにかみ笑顔で。

どうして今そんな顔ができるんだ。暫くはまた無言。

俺はこの緊張感が抜けるのを待ち、今のことを無かったことにしようとし掛ける。

いつも通りに話し掛けた。

「神田来ないな」

「来ないね」

彼女が目を閉じた。何の前触れもなく閉じた。

一瞬気の迷いが起きたがすぐに擦じ伏せる。

違うこれは試されているんだ。

俺という人間をもっと知る為の行為なのだ。

この状況下で俺がどうするか見ている。

俺が何も行動を起こさないでいると、暫くして彼女は諦めたように。

「つまんないの。勘違いするかと思ってたのに」

本気で騙されると思っていたらしい。俺も舐められたものだ。

「そんな思い上がってなんかいない。お前がそういう奴だったことぐらい少し一緒にいれば分かる」

まだ出逢って間もない俺でもな。

「そっかー。バレちゃったかー。これでまた一つ私を知れたね。――歩前進だ」

後退の間違いじゃないだろうな。

お前のことを知る度にお前のことを遠く感じるのは気のせいだよな。

俺とお前はやっぱり違う者同士だ。

どうしよつもなく遠い。

それでも、どうしても俺はその絆を壊したくない。

ようやくできた繋がりを守りたい。

ならばこいつの良いところ悪いところ、おもしろいところつまらないところ全て受け入れて初めて対等の人間関係が始まるのかもしれない

ない。

「そうだな」

今は同意。答を出すのを先延ばしにして保留。

どこまでもいい加減だ。

どこまでもどうしようもない。俺という人間は。

本来なら誰とも関わらずに生きて、一人で生き続けどんなに辛くても生き続け、最後に誰の目も届かないところで死んでいく筈だった。

絶望的なその未来から目を背けながら無意味に生きていく筈だった。

その運命は変わらない筈だった。

変わらない筈だった運命が変わろうとしている。

俺はもう独りじゃない。

大嫌いだった孤独を振り切って諦めていた宿命を覆し、俺は変わったのか？

頭の中を様々な思いが巡っていたところに教室のドアを僅かに開け、中を窺う者がいることに気が付いた。

僅かな隙間から片目だけを覗かせて。

俺が気付いたことに気付いたらしく、ドアがゆっくりと閉じられる。

・・・おいおい。

すかさずドアを開ける。

その先に思った通りのローテンション少女が立っていた。

「えと・・・。その・・・。ちょっと入りづらい雰囲気です・・・。でも少し気になって」

「もういいから。さっさと入れ」

「ごめんなさい」

神田安住がすまなそうにしながら二人の間に割り込む。

「あつ。神田さんいたの？なんだすぐ入ってくれば良かったのに。そこ寒かったでしょ」

「え・・・ええと。ごめんなさい」

謝ってばかりの彼女。

その顔からは生まれたばかりの赤子のような戸惑いが窺える。

危なかった。

少し間違えばこいつに決定的瞬間を目撃されるところだった。あれ？

でもこいつはいいのか？

もうなにもかも知られているんだし。

俺達の事情を。知られてしまっていることだし。

「今来たの。今……。だからっ……」

最初から見えていたらしい。

会話を全て聞かれていたらしい。彼女の表情がそれを物語っていた。

「神田。分かったから。もういいよ」

彼女が不憫に見えてきた。

「いや……。私邪魔だったらどっか行ってるけど……」

「いいよ。話は終わったから。お前はここにいる。どこにも行かない
くていい」

彼女は胸を撫で下ろす。

動揺がようやく収まり、いつもど通りの彼女が戻ってきた。

「少し寝坊しちゃって、いつもより遅くなったんだけど……」

予想通り朝は弱かったらしい。

「そしたら中でどんな感じてになってるか気になってつい……」

要は好奇心か。彼女にも案外子供っぽいところがあつたのか。

また一つ彼女を知れた。安西風に言うならだ。

「神田さん……。いやアズみんっ！」

「へ……。？」

「は……。？」

それはなんだ？いや大体想像はつくが。

「ニックネームだよ。神田さんって下の名前安住って言うんでしょ？だからアズみんっ。今からそう呼ぶことにしたからね」

「……。まあ……。良いけど……」

もしかして気に入ってたりして。

こいつも一応は女の子だからな。華の女子高生だからな。

友達からニックネームで呼ばれることに憧れていたって不思議じゃない。

それは年頃の少女なら誰でもやっていることだし。

神田がそれを望んでも全く不自然じゃない。

「はははっ。アズみんとか笑える」

「ちょっと？なんかバカにしてない？傷つくんだけど」

「嘘だよ。似合ってたんじゃない？」

「もう……」

「あれ……二人共いつの間にか仲良くなってるない？」

安西がそう言うてきた。

お前が仲良くしろって言ったんじゃないか。

「悪いかよ。なあ神田？」

「そんなに仲良くないって」

安西にはそう見えるのか。

彼女に嫉妬して欲しい俺はやはり卑怯で小さい人間。

彼女に自分のこと以外を見ないで欲しい独占欲。

自分と神田との間の繋がりをもっと見せつけない。

少しは苦しんだら良い。

彼女が俺のことで苦しむのを見たい。

俺はまた一つ自分を嫌いになってみた。

「良かった。仲良くなって。二人が楽しそうで私も嬉しいよ。」

本当に本当か？

本当に本当に本当に？

もっと悔しがれよ。

もっとその綺麗な顔に憎しみに歪んだ色を見せてくれよ。つまらない。

無反応が面白く無い。

「・・・カナデ、でいいのかな？」

神田が唐突に言った。

神田が彼女なりの勇気を振り絞って。俺達の方へ歩み寄ってくる。

「うん。カナデ。そうだね。そう呼んだら良いよ。アズミン」

やっぱり女同士の方が仲良くなれるのか。

仕方ないよな。女子二人に男一人じゃ。

俺だけ少し遠いのは仕方ない。別にいいそれくらいなら我慢できる。

我慢することは得意だ今迄もそうしてきた。そしてこれからもするだろう。

自分の感情を押さえ付けることを。

沸き上がる感情を捺し伏せて現実的にならなければならぬのだ。
俺はこれからも。

この二人と関わり合う為に何かを我慢しなければならぬことがきつとあるだろう。必ずやってくる現実が。

その時は・・・笑って傷つける自分でいたい。

7 / 日常を斬り裂いて

相変わらず春の訪れを感じられない日々。

ストーブの効いた心地良い教室ではクラスメートの面々が黙々と机に向かい世界史教師が黒板に書き連ねるわけの分からないカタカナの象形を、自らのノートだったりルーズリーフだったりに写していた。

話し声などは聞こえてこない。

比較的真面目な生徒が揃っているクラスだった。

携帯をいじっている者もないのは今どきは珍しいか。

安西も神田も真剣に授業を受けている。

とは言っても俺と彼女達の席は離れているので遠巻きに見ただけの感想だが。

周りの雰囲気の流れされて俺も取り敢えずノートにシャープペンシルを走らせる。

自分で書いてることの意味が分からないが。

一応俺も今年からは受験生だ。
今迄は大学などどうでもよかったが、最近になって考えを改めてみた。

さっさと自分の力だけで生きていけるようになる為にはそれが近道だと思った。

いつまでもこの生活が続くわけもない。

現実逃避しながら生きられるのは学生迄だ。

まだ少年だから色々と許されるが大人になったらそうはいかない。

大人になれば自分に情けをかけてくれる者なんていなくなる。

大人になれば何かをする度に面倒な約束事が付いて回る。

守らなければならぬルールがある。それを破れば罰を受けなければいけない。

子供の内は説教で済んだものを、大人に説教しても仕方ない。

すでに人間が完成している大人に何を言っても無駄。

痛い目を見なければ気付かないのはみんなそうだ。

高校を卒業したらあの二人との関係はどうなるのだろう。

今迄通り続けるのかそれとも疎遠になってしまうのか。

安西との関係は神田のそれとは違うのだから対応が変わってくる。

俺としてはこれからも二人とは仲良くやっていきたいとは思っている。

それでもこの先どうなるかは分からない。

どうなるか分からない未来程不確かなものはないからな。

そんな今から考えてもどうしようもないことを指先でシャーペンをクルクル回しながら思考する。

世界史教師がテスト範囲とは関係無い世間話を始めたのだから俺のせいじゃない。

周りの奴らも顔には出さなくても面倒そうにしているのが分かってしまう。

こんな大人にはなりたくないな。

自分で自分のことが見えていない人間は見苦しい。

初めて出逢ったときに安西も言っていた気がする。

周りから煙たがられているのを自分では気付かない人間はやり方が悪いのだと。

そうゆう奴は喋っているときより黙っているときの方がいくらかましだと思っただときがある。

その人間の印象を決定しているのはやはりその言動が殆んどを占めているとっいていい。

外見もそうだがその人間が何をどう感じそれをどう表すかを他人は注意深く観察しその人間がどうゆうタイプなのか判断する。

付き合っておいた方が自分にとって有益かそうでないかを決める足掛かりにする。

大勢の人間から見限られた者は、はい仲間外れの出来上がり。こっやっで差別が起こる。

なんのことはない他の誰でもない俺のことだ。

誰からも必要とされない人間は必然的に仲間外れになる。

誰が考えても分かりそうなものだけだ。

「あんた。真面目にやりなさいよ。今が何の時間か分かってるの？世界史の授業の時間なのよ。偉大なる先人に失礼じゃない」

一瞬誰が誰に話し掛けたのか分からなかった。

そんなシチュエーションに遭遇したことなんてない。

相手の方から声をかけられたことはいつからなかっただろう。

声の主を俺はその両眼で捉える。

次の瞬間。迫りくる凶刃。

迫りくる脅威。

風を切る物凄い音。

ズバァッ

唐突に起きたことに思考回路がついていけてない。

が、それでもなんとかその凶刃を両腕を交差させてガードする。

間一髪。まだ収まらない狂気。

完全に殺したはずの斬撃は更に牙をむき、俺の体重を軽く呑み込んで吹っ飛ばす。

抵抗する暇すら与えられずに教室の壁に叩き付けられた。何が起った？

何だよ。

クラス中から視線を集めているじゃないか。

目立たず注目されずに生きていくつもりだったのに。

いきなり有名人になってしまったようだ。

いつまでも床に座っているわけにはいかないので立ち上がって汚れを払う。

俺の隣の席に座っていた眼鏡を掛けた女子生徒が片手で竹刀を構えている。

犯人はこいつしかいない。

「おいお前。何すんだよ」

いきなり竹刀で殴られたにしては穏やかに問い掛ける俺。

きつい目付きで俺を睨み付けてくる彼女は面倒臭そうに言う。

「あんたが悪いんでしょ。あんた不真面目なのが露骨すぎるのよ。そうゆうの不愉快だから」

なんだそれ。

どうしてそんなことで俺はお前に竹刀で叩かれなきゃいけないんだ？

周囲の沈黙が痛い。

全員の視線が世界史教師も含めて俺と彼女に集まっていた。

安西と神田の二人も例外ではなく。

「あんた言ってもきかなそうな顔してるから殴って話しきかせようとしただけよ」

理不尽だろ。そんな理由で竹刀を向けられてたまるか。

よく見ると彼女の机の下にその竹刀を収めていただろうケースが落ちていた。

俺はその攻撃に直前まで気付かなかった。

気付いたときには避けられるタイミングは無かった。それにだ。

こいつ今の斬撃を片手で椅子に座りながら繰り出したっていつのか。どんな剣さばきだよ。

俺は昔格闘技の経験があっただが、敵にダメージを与える攻撃を放つ為にはしっかりとした体重移動が必要不可欠なのだ。

今のはいくら不意をつかれたとはいえ、完全に状態を崩された。

ブランクもあるだろうが線の細く見える少女に軽々とあしらわれたことが少しの屈辱。

だがこいつ普通じゃない。竹刀を構える姿を見れば一目瞭然。

竹刀と一体化しているかのような構えは見る者に違和感を与えない。剣で闘う者の構えだ。

彼女は落ちていたケースを拾い上げ竹刀をしまう。

こいつが竹刀を取り出したことさえ俺は気付かなかったのか。本当に鈍ったな。

「次は気絶させるわよ」

「だから俺はどうすればお前に気絶させられずに済むんだ？今のだつて訳分らない。いきなり何すんだ。謝罪を要求する」

無駄だと分かつてはいたが。

名前も知らない初対面の相手にこんな仕打ちができる奴が謝るくらいなら最初からこんなことはしない。

「今度またそんな私の機嫌を損ねるような態度でいたらとゆう意味よ。謝らないわ。私は悪くないもの」

思った通りの自分勝手な言い分。自分のすることを疑うことは決して無いという感じだ。

どんな時でも自分の力を信じられるという裏返しかもしれないが。

「なんだそれ？俺はお前になにかしたのか？竹刀の錆にならなきゃならないことを何かしたのか？」

「・・・存在が気に入らない」

存在を否定された。じゃあ俺は存在が気に入らなくて竹刀の錆にされそうだったのか。

・・・ここは落ち込むところか。

「とにかく・・・」

彼女は眼鏡を指先で押し上げる仕草をして。

「あんだ気に入らないのよ。淡野観月はここに宣言するわ。私の視界に入つてこないでくれる？」

清々しく宣言された。清々しく拒否された。頼んでもいないのに。

告白する前にフラれたみたいなの？

何でもいいけど知り合ってしまったのだ。

眼鏡を掛けた、その日のHRで見事クラス委員長に任命されることとなる彼女と。

俺の隣の席に陣取る彼女と。

鞆から伸びるように見えている竹刀に脅える日々も同時にスタートした。

8 / 彩りを添えて

「ねーねー。どうしたの？何したの？何があつたの？君淡野さんに喧嘩でも売ったの？」

「何も売ってないし何をどうしたらあんなつたのか俺も知らん。こいつに聞けば？」

隣の席に座る淡野観月を指差して提案する。

「だからっ・・・」
「ビュン

俺の額に竹刀の先端がヒタヒタと触れてくる。これが殺し合いなら俺の首はもう飛んでいるだろう。

「私のこと指で指さないで」

「すみませんでした」

両手を挙げて降参。こちらに反抗の意志が無いことを示す。なんでクラスメートに降伏しなればならないんだ。

「淡野さんって剣道部の部長だよね。去年インターハイ迄いったんでしょ？すごいね」

ああこいつが。我が校の伝統ある女子剣道部を率いる天才剣道少女か。噂にきいていたが。

「大したことないわ。当然のことだもの。私に勝てる女子高生なん

ているわけがない。」

なんて自信だよ。こいつ天才か？

天才なのか？

天才は自分より優れた者の存在等信じないものなのか。

だからこいつは勝ち続けることが出来るのかも知れない。

「大したことだよ。誰よりも優れていることが大したことじゃないわけないもん。きつとそれに見合う努力を積み重ねてきたんだろっから。」

淡野観月と会話を成立させている。

この暴力を何の躊躇いもなく他人に振るうような奴と対等に渡り合っている。改めて感心だ。

安西奏という人間に。

「悪いけど私、最初から強かったから。最初から自分の強さを疑ったことなんて無いから」

こんな奴現実にいるのかよ。

女なのに超格好良い。そこ迄迷いが無いともう格好良い。

「そうなんだ……。でも凄いよ。凄く羨ましいな。私才能なんて何も持ってないからさ……」

何を言ってる。お前には誰にも負けない才能があるじゃないか。

それが俺とお前を繋げたんじゃないのか？

「知らないわよそんなこと」

冷たくあしらう彼女。

安西を相手にまだ気を許さない奴は珍しい。

彼女の人の心を掴む力にまだ抗えるとはな。
ちなみに今は昼休みの時間だ。

他のクラスメート達は各々で机を合わせるなり食堂へ行くなりして
午前の疲れを癒し午後の授業に備える。

「そんなこと言わないでさー。一緒にお昼にしない？その彼とあ
たし達とあそこのアズみんとっ」

窓際の席で一人でお弁当を広げようとしていた神田が気付いてこっ
ちを振り返る。首を傾げている。

「・・・俺もかよ」

周囲の視線が痛い。特に男子。

この三人は俺の目からみてもこのクラスの綺麗所だろう。

明らかに敵意を持った眼差しが向けられる。俺のせいじゃないのに。

「私お弁当はいつも一人でとることにしてるから」

「えー。良いじゃん良いじゃん。一人で食べるより四人でワイワイやった方が美味しいよー」

「だから・・・」

「えいつ」

淡野の机に無理矢理弁当箱を広げる彼女。

神田も遅ればせながら弁当箱を包み直して俺達の方へやって来て、
どうしようか迷っている。

「お前はこっち来れば？」

俺は自分の机を指差して言う。どうせ隣なのだから問題無い。

「うん」

彼女はそれを了承し俺の机に向かい合うように持ってきた自分の机の椅子を置いて座る。

彼女は弁当箱を改めて開く。色鮮やかな可愛いお弁当という感じだった。

「それ自分で作ったのか？」

好奇心からくる興味。

見た感じでは中々良く出来ているような気がする。本当に小さな弁当箱だけだ。

それで足りるのだろうか。

俺も自分の弁当箱を取り出す。

「ええと、まあそうだけど・・・」

「へえ・・・。んーと・・・」

神田作の弁当箱の料理を一つ一つ品定めし。一つに狙いを定めて箸を伸ばした。

「あつ。ええと。自信はないんだけど・・・」

ふーん。卵焼きを取り上げて口に運ぶ。そうだな・・・。

「まあまあ良いけど少し甘すぎるような・・・」

まあ男女では味覚の差があるのかもしれないが。

「そうかな？私はこのくらいが丁度良いと思うんだけど」

「俺の試してみる？」

自分の弁当箱を神田に差し出す。俺の卵焼きを勧める。

「これ君が作ったの？料理するんだ。意外」悪いかよ。

こう見えても何かを調理することにおいては俺も淡野並みの自信をもっていると自負しているんだぜ。

「じゃあ遠慮なく……」

卵焼きを箸で二つに切ってその一つを神田は食べた。

急に彼女は自分のほっぺを押さえる。あれどうした？

「……？」

何かほっぺを押さえたまま悶え始めた。神田の様子がおかしい。

あれ自信あつたんだけど。口に合わなかった？

「……お、美味しい。美味すぎる。なにこれ……？これ卵焼き……？」

当たり前だ。信じられないかのように目の前の俺の弁当箱を見つめている彼女。

「えっ？何々？そんなに美味しいの？」

淡野と雑談していた安西がそれを聞き付けて自分の箸を伸ばす。

呆然とする神田を尻目に神田が二つに分けた内のもう一つを口に運ぶ。彼女もほっぺを押さえた。

「お、美味しいっ。とろけたっ。口の中でとろけたっ。どうやったのこれ？」

「どつって普通に……」

できてしまうのだから仕方ない。

なんか大好評だった。そんなに自分の料理を褒められたのは初めての経験だった。

驚かれたのではなく、褒められたのは。……悪くないな。悪くない。

「美味しいっ美味しいっ。はあー。なんか女子としてシヨックだなー。こんなの太刀打ちできないよ。誰に習ったの？お母さん料理上手なの？」

「いや……自分で……」

「凄いっ。天才だっ。ここにもう一人天才がいたよっ」

いやそんなに褒め殺しにされても何も出ないぞ。

「……」

ん？ふと淡野の方を見るとなんだか気になっている様子。

他の二人の反応を見たからか。ニヤリ

「あれどうした？淡野もしかしてこれ食べてみたいんじゃない？」

「はあっ？なにそれ・・・？ぜ、全然っ。そんなわけないでしょっ
顔に書いてあった。食べたい食べたい食べたいって。」

「強がるなって。さあどうぞどうぞ」

「だから私は・・・でもそこ迄言うなら・・・」

彼女の箸を伸ばした指を掴んで止める。竹刀を持っていない彼女の動きは読みやすかった。

「・・・何よ」

「いやさ。さっき俺のことぶっ飛ばしてくれたのを謝って欲しいと思っただけ」

容赦はしない。さっきお前が容赦しなかったのと同じようにな。

「くっ・・・。」

悔しがる彼女はまるで子供のようなあどけなさが全開になっていてこれはこれで可愛い。

強者淡野観月を屈服させるのは気分が良いな。愉快愉快。

俺はまた一つ自分を嫌いになってみた。

「どうしたどうした。別に俺はどっちでもいいけど？」

逆襲の手は緩めない。

「……ごめんなさい」

本当に小さな声で呟く彼女。

「え？何か言ったか？悪い聞こえなかった」

我ながらえげつない。

俺には女子をいじめて喜ぶ趣味があったとは。驚きだ。

「ごめつんつなつさっいつ！これで良いんでしょこれです。もう

いいわ。私もう行くからっ」

「ちょっと待て」

彼女の口元に俺の箸で卵焼きを突き付ける。くらえ。竹刀のお礼だ。

「……」

暫く黙る彼女だったが。観念してパクリ。

もぐもぐとよく噛んで味わっている。最後には彼女までもがほっぺ
たを押さえ。

「おいしい……」

「ん？なんか言ったか？」

「言っていないっ」

彼女はそのまま教室を飛び出していった。全速力で。ブレザーのスカートを翻して。

もっと素直になればいいのに。

本当の気持ちを伝えるだけでいいんだぞ。それで少しは変わる。

「行っちゃったね。淡野さん。可愛いね淡野さん」

「ああそうだな」

可愛いさと凶刃が紙一重の気がするけどな。

「・・・?」

さっきからローテーション少女が置いてかれていた。ははは。こんな日常もたまには良い。

9 / 残酷な思考は巡る

嗚呼。まただ。どうして私なのだろう。

この世界に腐る程蔓延っている他の人間じゃないのだろう。

どうして私なのだろう。

私じゃなければ平気で笑ってやるのに。

他人事のように笑えるのに。

自分じゃないことの優越感を全身で感じられるのに。

他人の不幸を自分の幸福とできるのに。

どうして神様私を選ぶ？理由が知りたい。

あなたとお話がしたい。

叶わないことだと分かっているけど。

神様なんて人間の想像の中にしかない人間の都合によって造り出された産物じゃないか。

私もどうかしている。

こうなったのは自分に運が無かったからだ。

神様のせいにしてようなんて狡い。

そんな罪深い所業が許される筈がない。

そんな思考に行き着く私はやはりこうなるべきだったのかな。

これは当然にして当たり前のことなんだろうか。

私は何をしたの？神様の悪口を言ったから？

それで神様は怒って私に意地悪をしてるの？

もしそうだったらごめんなさい。本当にごめんなさい。

謝るから許して下さい。お願いします。

もうしませんから許して下さい。

私の罪を許して下さい。

私を救って下さい。

今私は生きている心地がしません。

生きて呼吸もしているし手足も自由に動くけれど、まるで死んでい
るように生きています。

生きていることが辛いです。

苦しいです。

呼吸の一つ一つが苦しいです。

こんなに生きているのが耐え難いものならば生きていたくなくはないと思いました。

こんな命なんかいららないと思いました。

死に向かって身を投げようと思いました。けれどできませんでした。

そのときになって私は気付くのでした。

私は生きたくはなくても死にたくもなかったのです。なんて自分勝手なのでしょう。

人間である以上死にたくないのならば生きるしかない。

私はその狭間でさ迷い苦しみました。生死をさ迷うとはよくいったものです。

私は結局今を生きることになりました。

私は死ぬのが怖かったです。

だって「死」って痛いでしょう？まず最初に連想するのは痛みでしょう？

死の苦しみなんて私にはきつと耐えられません。

次に来るのはもつと酷いです。

「死」は汚いです。

決して綺麗な「死」なんてないです。

私の「死」は晒し者にされいい見せしめとなり私は侮辱を受けるでしょう。

嗚呼そんなのは嫌。

人間の「死」は特に汚い。

「死」と唯一闘える人間だからこそ見るに耐えない。

人間の「死」は人間が「死」に負けた証だからです。

今はインターネットで色々なものが見られます。

私はパソコンの液晶画面に人の「死」をたくさん見つけました。

それはそれは酷い「死」ばかりでした。

それを見た他の人は口を揃えてこう書き込んでいました。

こうはなりたくないねって。

私は益々「死」に嫌悪を抱くようになりました。

どんなに足掻こうがいつかは死ぬのにですよ。

笑えますよね？

死にたくないからせめて生きている自分を好きになろうとしました。無駄でした。そんなこと私にはできはしませんでした。最初から無理だったのです。

元々生きていたくなかった私なのですから。苦しい。

どうしようもなく苦しい。

本当に苦しいのは救いなんかないことだと思いました。

最初から救いようのある苦しみなど苦しくないじゃないですか。

もう少し我慢すれば楽になれることが分かっているなら私だってこんなに苦しくはないです。

嗚呼。まただ。私は今誰か分からない者の悪意に晒されています。

誰かが自分を傷つけるべく悪意を向けているということがすでに耐えようのない苦しみでした。私にとっては。

そんな間違いが起こらないように今まで頑張ってきたとゆづのに。

私は誰かに苦しむことを望まれていたのです。

このことを他の誰にも知られたくない。

彼にも彼女にも知られたくない。もし知られたら。

あの二人は私のことをどう思うでしょうか？

もしかして助けてくれる？

いやいやそんなことがある筈ありません。

あの約束は口先だけの絵空事です。

言うだけ言っておけば表面上は綺麗に纏まるからそうした迄の中身の無い誓いでした。

きっとこのことが知れば二人は私から離れていくに違いない。そうに決まっている。

誰が面倒事に自分から巻き込まれたいと思うでしょうか。あの二人に限りません。

私の周りにいる人は私を見捨てるでしょう。そんなことがあってはならない。

今まで積み上げてきた私の努力が無駄になるなんて許さない。絶対許さない。

それだけは許してはならない。これはきつと試練なのだ。
神様が私を試しているのだ。

私がこの逆境を切り抜けられるか見たいと言っている。

私には聞こえます。

ならば一人でやるしかない。

自分一人で誰の助けも受けずに。

私の問題に他人を巻き込むわけにはいかない。

これは私のエゴなのですから。

さあやろう。立ち上がるんだ。

見ている私だって黙ってやられてばかりじゃないことを思い知らせ
てやる。

そして後悔させてやる。

私を追い詰めたことを。

お前を追い詰めてから後悔させてやる。嗚呼今から楽しみだ。

精々私を楽しませてくれなきゃ酷いよ。

10 / 特別な最強

まただ。また悪い夢を見ていた気がする。

最近は悪夢をみるが増えているな。

この精神が擦り切れるような感覚はどうにも慣れない。

悪夢に慣れたくなんてないけどな。俺に呼び掛ける声が聞こえる。

「おはよう。目覚めた？私が見えてる？声聞こえてるかな？」

寝起きで曖昧な感覚を振り払い、今置かれた状況を把握するように努める。

俺がたつた今迄体を預けていたのは俺の机の上に乗った俺の鞆であり、俺に向けて語りかけているのはまごうことなき安西奏だった。

「ん……。ああ……。聞こえてる聞こえてる」

「良かったー。目が覚めたら私のこと忘れてるんじゃないかって心配してたんだ」

「なんだそれ」

クラスの人間が半分以上減っている今はどうやら放課後らしい。

記憶は午後の授業の途中から途切れていた。眠い。

「やっと起きた」

神田が俺の隣である淡野がいた席に座って俺の顔を覗きこんでいた。どうやら待たせてしまったらしい。律儀に待つこいつらもこいつらだが。

俺のことなんて放っておいて二人で帰ればいいのに。

「ねえねえ。これから淡野さんの剣道部見に行かない？暇じゃなかったし達」

「なんで？」

「だから今言ったでしょ。暇だから」

「なんで暇だからって淡野が竹刀をバンバン打ち込むのを見に行かないやらねえんだよ？あれ軽くトラウマなんだぞ」

あいつが竹刀を振る度に屈辱が蘇る。

大衆の面前で無様な目にあつたことを思い出すことになる。

「えー。でも淡野さん悪い人じゃないよ。もしそんな人だったら剣道部部长なんて任されないと思うな」

「分かってるよ」

多少言動に難はあるが確かにあいつはそれでも真っ直ぐだ。

良い意味でも悪い意味でも。たまに素直じゃないときもあるけど。

それも全部含めて淡野観月という一人の人間だ。

その一人の人間を俺はそれ程嫌いになれはしなかった。

きっと俺なんかよりも上等な人間なのだ。俺は何かを言えるような立場にはいない。

人のことを言える程自分の中身に自信なんてない。

「それじゃあ行くっか？」

「本当に行くのかよ……」

正直言つて遠慮したい。

あっちが真剣にやっている所に俺達なんかがいっいたら邪魔しにきたと思われてもおかしくない。

特にあいつ。次は気絶させるとか言つてたし。

「じゃあ少しだけだぞ。本当に少しだけだ。分かったか？あいつに気付かれる前に帰るんだ」

「えー。そんなのつまんないー。淡野さんとお話ししたいー」

「したきゃ勝手にしてろ。俺は帰る」

「はいはい分かったよう。冷たいんだね。君は。クールだもんね。分かったよ」

「ならさっさと行こうか。体育館でやってるのか？」

「そつだよ。さっき聞いたから。もう始まってる筈」

いつの間に。最初からその気というわけか。

それにしてもどうしてそこまでして意地張るんだろう？

剣道部入部希望とか？

そんなわけないか。本人は運動音痴だと言っていたし。

急に剣の道に目覚めたとかいうわけでもあるまい。

こいつは淡野とも仲良くなりたいただけだと思っ。

俺達はまだ僅かに生徒の残る教室を後にし、別の棟に位置する我が校の体育館を目指す。

その途中に神田が口を開いた。

「うちの剣道部って強いんだよね。有名なんですよ？インターハイ行ったって・・・」

「そつだな」

「じゃあみんな真剣にやっってるんじゃない？」

「そうだね」

「私達迷惑なんじゃない？」

「・・・」

「二人共何で黙るの・・・？」

いや。やっぱりそうだよ。

安西が何もかも無理矢理進めようとするから忘れていたが俺達は完全に部外者だ。

いきなり押し掛けて行って大丈夫だろうか？

「うーん。大丈夫じゃない？部長の知り合いですつとか言えばさ」

いや。あいつと俺達はいさつき初めて言葉を交わしたばかりだ。

それをあろううことか知り合いだなんて虫が良すぎる。勝手なこと言っただけじゃねえよ。

淡野からみれば俺達はただのクラスメイトでしかない。

「本当に大丈夫かよ？追い返されたりしても文句は言えないだろ」

「なんとかなるって」

「大丈夫かなあ・・・」

神田が心配そうな顔をしている。先行き不安な感じだ。

そんな会話をしている内にもう既に体育館の前。

着いた。さて誰が先陣をきるのか。嫌な予感がする。

「ねえ。開けてよ。そして先に行って様子を見てきて」

「何で俺が？お前が言い出したことだろ？お前が行けよ」

「だって怖いもん。さっきからなんか声が聞こえるし。凄い音してるし。ここは男子が行くべきじゃない？」

部員達の掛け声が鳴り響く館内から外迄熱気が伝わってくる。

バシーンバシーンとは竹刀と竹刀がぶつかり合う音だろうか。

ハア。溜め息。行くしかないか。この扉を開けなきゃ話は進みそうにない。

「じゃあ行ってくる・・・」

「頑張ってー」

人の気も知らないでこいつは……。

重い扉を開けて中へ踏み出す。そこは殺気の真っ只中だった。

闘いの緊張感の中へ丸腰で取り残された俺の元へ数多くの視線が集まる。

そこは畳の敷かれた広い空間で、男女が別れてそれぞれ実践形式の練習を行っているようだった。

皆面で顔が隠れているが突然の来訪者にほぼ全員が注目しているのが分かる。

一斉に掛け声と竹刀の音が薄れ沈黙が辺りを包んだのだが、そんな中で空気の違う場所があった。

その体格からして女子なのにも関わらず背の高い男子を相手にしている。

動きがまるで尋常ではないのが誰の目から見ても明らか。

男子の方が圧倒されていた。

彼女の一撃一撃についていくのが精一杯のようだ。

彼女は攻撃の手を緩めることなく、彼の面を的確に狙って追撃。
追撃。

無駄の無く鋭い振り抜きで呆気にとられる程素早く斬り込まれる竹

刀。

辛うじて竹刀で受ける彼はあっという間に後ろへ追い詰められてゆく。

一旦竹刀を引き、状態を整えたと思えばすぐさまその両腕から振られる斬撃。

その攻撃からは容赦等微塵も感じられない。

ただ相手を打ち倒すのみ。単純にして明快。攻撃こそ最大の防御。彼の反撃は許されない。

そんな隙を与える気等無い。

フェイントで状態を崩された彼は彼女の執拗な連続攻撃に耐えられずに竹刀を弾かれる。そこへ逃さず一閃。

「ハアッ」

切り裂くように走り抜け、防ぐ術を持たない彼の面に一撃を重く放つ。

「メエーンッ」

勝負は着いた。

凄い。

単純な腕力だけなら男の方に分がある筈だ。なのに彼女はそれを物ともしない。

というか感じさせることの無い闘い方をする。とても女子高生のやることとは思えない。

凡人を遥かに超越している。そこにあるのは戦闘者の姿だった。

彼女の動きが速すぎて目が追いつかなかったが、今ははっきりと見える。

彼女のしている垂れに「淡野」と書いてあった。彼女はしていた面を外す。

すかさずそこへ一年生の女子が受け取りに行く。部長の貫禄が窺えた。威厳も十分。

その身に纏うオーラからして彼女の特別を感じさせるのだった。

眼鏡を彼女は外していた。どうやら練習中にはかけていないようだ。

やばい。格好良い。

最初に見たときとは違う顔をしていた。汗をかいて濡れた髪すら凛々しく思える。

神田や安西とは違う意味で彼女も魅力的な女子だった。格好良過ぎ

るだろ。

やがて周りの異変に気付き始める彼女。

自分達以外の物音が聞こえなくなっていたことに気付き、皆の注目の対象に目を向ける。

俺の姿を見つけると少し驚いた顔をして、そして少し考えるように俯き、そして呆れたようになって言われた。

「なんであんたがここにいるの？」

「見学だよ。邪魔はしないから少し練習を見ていて構わないか？」
結局こいつに見付かってしまった。予定には無かったがまあいい。

「ふーん……」

何かジロジロ見られているような。

「まあ良いけど……」

一応の許可は部長から出た。ならばあとの二人をここへ……。

「あんたさあ……何してたの？」

「……?」

「昔何かしていたでしょ？」

「何かって……」

「何か格闘技をやってたでしょ？」

「まあ……」

そこ迄見抜くか。戦闘者の直感だろうか？

同じ闘う者に対して自分と似た何かを感じ取れるとでも？

「さつきだってそう。私そんなに手を抜いたつもりじゃなかったのに、あんた防いだ。まともに食らえば暫くは立ち上がれない位の一撃だった筈。なのにあんたすぐに復活した。素人なわけない。隠しても無駄」

別に隠してたわけじゃない。話す理由が無かったただけだ。

「何をやっていたの？」

「前に空手をやっていたことがある。もうやめたよ」

「あらそう。何だ残念。空手と剣道じゃ勝負がつかないわね。あなたのこと打ち負かしてみたかったのに。でも何でやめたの？勿体無い。きつとあんた才能あるのに。闘う才能の持ち主ってゆうのはそうはいないわ。生まれたときに決まってしまうものだから」

「それはどうも」

途中からどうでもよくなったからだ。

俺に勝てる奴がないことが、どこかで愉悦から退屈に変わった。

俺はいつまでこんな無意味なことを繰り返すつもりなのかって。

相手を叩きのめして迄得るものが見つからなくなってから俺は道場には行かなくなった。それを止める奴もいなかった。

当たり前だ。道場仲間等所詮はライバル。

調子乗った奴がいなくなって清々したことだろう。

「じゃあさ。剣道の達人と空手の達人が闘ったらどっちが強いのかしら。」

「さあ？武器持つてる方が有利なんじゃないか？」

「弱気ね。あんたプライドとかないの？俺の方が強いって思えないの？つまらないな」

「俺はもう闘わないって。誰かを殴るのはもう嫌だ。飽きたんだよ下らない」

「あっそう。じゃあもういいわよ。・・・でも少し見直した。さっきは何も考えずにぶっ飛ばしてごめんなさい。あたしが悪かった」

「やっぱ悪い奴じゃない。淡野観月は格好良い女子高生だった。」

「分かればいい。俺はもう帰る。これ以上いても仕方ないからな。」

「ここにいる意味が無くなる前にいなくなるとしよう」

「あらそう。じゃあバイバイ。また明日会いましょ」

「ああ。また明日」

もう面倒になってしまった。

後ろからこちらを窺っている二人のことを忘れていたが、何かもうどうでもよくなってしまった。

「あれ？もう帰るの？」

安西奏を振り切って扉から外に出た。

「先に帰る」

それを彼女は止めない。神田も立ち尽くすのみ。

二人の少女を置き去りにして俺は、一人帰路につくのだった。

寒空の下を一人歩きだす。

11 / するべきこと

彼は私達を置いて去っていった。

私に一言だけ残して行ってしまった。どうしてだろう。

彼を止めることができない。何故だろう？

そのときは分からなかった。

「あれ？帰っちゃったけど。何かあったのかな？」

私の横から心配そうに彼女は言う。

彼が行ってしまった理由。それはもしかしたら彼女が知っているかもしれない。

ここからは何も聞えなかったが一体何を話していたんだろう。

「淡野さんに聞いてみよっか」

私は彼が作り出した沈黙の中を通って、まだ一人佇む彼女のもとへ。

「淡野さん。また会ったね。安西です。名前覚えてくれたかな？」

私の一歩一歩を見つめて待っていた彼女はまるで分かっていたかのような表情でこう返す。

「アンザイカナデでしょ。格好良い名前だったから印象に残っていたわ」

どうやら鬪いの集中力がまだ残っているらしく、さっき話したときとは口調というか声にこもる感情が違っている。何かやりづらいな

「こんなことしていいの？彼行っちゃったけど。ついていかなくていいの？友達なんでしょ？」

私と彼は友達なんて簡単な言葉で表せるような薄い関係じゃない。

私と彼のこと数回見比べただけで勝手なこと言わないで欲しい。

決めた。こいつは仲間に入れてやらない。

お前なんかに馴れ合いなんて必要無いだろう？

私は淡野観月という人間を拒否する。それは私の中で既に決定された。

「別にいいの。私達はお互いを下らないルールで縛ったりしない、フリーダムなグループだからさっ」

「そう。楽しそうね。じゃあ後ろのあの娘も、そのグループの一員なのかしら？」

少し離れた所に立つアズみんなを指差して言った。私のアズみんなを指

で刺すな。

「そうだよ。かけがえのない仲間だよ。彼もアズみんも。他の誰にも負けない固い絆を持った仲間」

羨ましい？

羨ましいでしょ？

お前には一生をかけても手に入れられないものだ。私には分かる。

色々な人間の考えること、どうやれば心を開くか、どうやれば自分のことを好きになるか、ずっと見続けてきた私には分かる。お前には絶対に唯一無二は無い。

本当の意味で心を通わせることのできる存在はいないのだ。

それはこいつが闘うことでしか心を通わせることができない人間だからだ。

自分でもそれを不満だと思ってもいない。

それもその筈。だって自分自身が唯一無二だから。

「そうなの。・・・そうなんだ。凄じじゃない。素晴らしいことね。中々できないものよね。お互いに以心伝心ってゆうの？近付けば近付く程擦れ違ってしまふものよね。人間関係って」

分かったようなことを。知ったような口を。

・・・まあいい。そんなことより・・・。

「淡野さん。さっき何話してたの？淡野さんに何か言われて、彼の表情が変わったような気がしたんだけど」

「ちよつと待って・・・」

彼女は私達の周りで未だにそうしている沈黙に向かって良く響く声を出した。

「全員練習に戻って。これは見せ物じゃありません。いつ迄そうしているつもり？」

彼が現れたときから竹刀を止めこちらに注目していた剣道部部員達は部長の一喝に慌てて練習を再開させる。

再び先程迄の掛け声が響き熱気が立ち込めた。

「ごめんなさい。これでも部長なの。ここは邪魔だから向こうへ行きますよう」

私達三人は体育館、とは言ってもこの館は、学校にいくつかある内の剣道部に割り当てられた専用のものだったが。とにかく畳の敷かれた隅の方へ場所を移す。

「彼？私は大したことは言ってないけど。少し話して自分はもうここにいても仕方無いからって。じゃあまた明日って、だけなんだけど」

「そうなの・・・」

本当だろうか？少し待とう。

この人間はどうやら他の大多数のそれとは明らかに異なっている。

この私を前にしてまだ自分を見失わない所があのだと二人と似ている。

本当に勿体無い。もう後戻りはしないけど、私達には違う未来もあった。

「どうしちゃったのかな？私なんか悪いこと言ったのかな？」

「アズみんは関係無いと思うよ」

「・・・関係無いってゆうのもまた違う意味で傷つくな。私の知らない所で私の手の届かない場所で一人で何かを抱えていたかもしれないってことでしょ？」

それは私に対しても当てはまること。

私だって彼が全然知らない所で何か楽しいことをしていて、それを私に内緒にされたら面白くない。

誰だって除け者にされるのは嫌だろう。

そこでふと気付く。

大勢の喧騒の中に一人、こちらを見つめている男子生徒がいた。気

のせいだろうか？

その視線は私一人にのみ向けられているように思えてならない。どうしてだろうか？

私はそこに何か良くないものを感じる。

何か不吉のような、ネガティブの塊のような、マイナス感情を帯びた視線。

自分を脅かすかもしれないその眼差しに、私は身震う。

心の中を侵食していくよく分からない薄暗いもの。

今更になって私は思い出す。

あいつ。さっき彼女と闘っていた奴だ。彼女に竹刀を弾かれ、負かされた奴だ。

彼の顔は面が邪魔して知り得ないが、彼の着けた垂れを見て再び全身に前より強い戦慄が走る。なんで？どうして？

あいつがここに……。

その名前は今の私から平静を奪い取るには十分過ぎる程に絶望的であり、尚且つ愛しい迄に待ちわびた、救いの手でもあった。

神様が私に救いの手を差し伸べてくれたんだ。

伐つべき仇と私を引き合わせてくれたのだ。そうに違いない。

「ねえ淡野さん。あの人は？ほらあそこにいる、さっきの淡野さんの練習相手」

私と目が合ったことを感じたのか、彼は既に喧騒の中に紛れていった。

「近江君のこと？彼がどうかした？もしかしてタイプとか？我が部の期待のルーキーを誘惑してほしくはないんだけど？」

まさか。タイプじゃないから私の方から振ってやったんだから。

オウミシユン。

去年、私がまだ恋愛で遊んでいた時期に告白された数多くの男子生徒の内の一人だった。

あれはいつだったか。今と同じ寒い冬の日だったような気がする。

私が教室で友人と談笑していたときのこと。

一人の一年生の男子、つまり後輩が二年生の私のクラス迄やってきた。

彼は声の届く範囲にいた生徒に「安西先輩を呼んでください。」と尋ねたらしい。

私はクラスメートの男子に呼ばれ、「安西。一年生が来てる。」そ

の後輩男子に「相談したいことがある。」といわれ、剣道部の体育館迄ついていった。

教室を出る途中に友人の女子に冷やかされたが、まさかこんな見ず知らずの子に限ってそんなことはないだろうと思った。

果たしてその想像は間違っていた。

彼は。オウミシユンは、二人きりになると私に告白してきた。当然愛の告白。

入学してから初めての一年生と二年生の対面式で大勢の友人に囲まれた私を見つけたこと。

その後も私のことを覚えていて意識して私の姿を探したことが何度もあるということ。

そして時間だけが過ぎ、今になって自分の気持ちをやっと理解できたこと。

勇気を振り絞って今ここにこうして立っていること。

彼は強い決意の窺える表情で私に打ち明けた。

それに対して私はどうしたか、という。正直どうでもいいと思った。

私に密かに想いを寄せていたといわれても私は知らない。

私はそんなにロマンチックな人間じゃない。

そのオウミシユンとゆう一年生は恵まれた容姿と運動神経で女子の間では人気のある方だったが、だからこそ私は気に入らなかった。

自分ならあの安西奏と付き合えるとも思っただろうか？

私がそんな上っ面だけなぞったような相手になびくとも思っただのなら、それは間違っている。

私が見つめているのはその人間の中身だ。

外見だけを着飾って満足している奴が私は嫌いだ。

彼の告白を受けての私の第一声は。

「ごめんなさい。私はあなたとは付き合えません。もっとあなたに合っている人がいると思うよ。私なんかよりもっと良い人が・・・」

私はいつも決まってそう言うのだった。興味の無い相手には。

そうすれば大抵の場合は相手から引く。

勿論中には悪くない者もいたりする。その時は少し遊んでみようか
なってゆう風にね。

試してみるわけ。

私って性格悪い！

私の拒絶を受けた彼は、見苦しい抵抗をするわけでもなく潔く諦め

たらしく、私の前から去っていった。

そうまるで先程の彼のように。

ああ。場所も丁度おんなじだ。

彼等の後ろ姿が重なって見えた。去っていく背中が。寂しそうな背中が。

「いやそんなんじゃないよ、なんとなく」

「安心した。あなたからの誘いを断れる男子なんていないもの。我が部の戦力低下を招くところだった」

「褒めても何にもないよ」

「謙遜は逆に嫌味よ。まあ、あなたには関係無い話か」

何か調子狂うなあ。

もしかして今迄のは全部私の思い込みで、彼女とは仲良くなれるかもしれない。

女同士は一度ぶつかり合った方が距離が縮まるのかも。

まあそれはともかくやることは決まったのだ。

反撃しようにも今迄はどうしようもなかったけれど。

目の前に道が現れた。進むべき道が。

神様のくれた宝の地図。

大切に大切に私の心の引き出しの中にしまっておこう。待っていて。もうすぐ思い知らせてやるから。待ってて神様。私のこと見ててね。

「じゃあミズキっ。私達も帰るね。練習の邪魔してごめんね。アズ
みん行くよ」

「待ってカナデ・・・」

その場を後にする私達。別れ際にミズキが戸惑いながら言った。

「ミズキって何?・・・あたしか」

もしかしたら天然さんなのかもね。

12 / 一人から二人になってまた一人

寒い時期特有の活気のようなもので賑わう街を、一人歩いていた。

駅前通りのデパートが列なる街並みは人、人、人だらけ。

駅前広場にはどうやらテレビの取材がきているらしく、

テレビレポーターがマイクに向かって話す様を多くの人々が一目見ようと集まってきていた。

寒いから皆一ヶ所に集まるのが好きなのかもしれない。

皆自分以外の誰かの温もりを求めているのかもしれない。

人の暖かさを忘れてしまわない為に。

今更になって俺は後悔しているのだった。

一人で来てしまったことを。あの二人を置いてきてしまったことを。

奴らが横にいたらどうゆう話題に今頃なっているだろうか？

ねえねえ××君××君。人がいっぱいだよ。

色々な人がいるね。

ここにいる全ての人達にそれぞれ全く違う人生があると思うとなんか不思議だね。

私ができることのできる人生は自分のだけなのね。

ああ私何言ってるんだろ。

ていつか聞いてる？

私の声ちゃんと聞こうとしてくれる？

いない人間をそこにいるものとして、脳内で二人分の会話をするのは本当に虚しいな。

ならば何故そんなことをするのかって？

どんなに強がった所で、俺も結局は誰かにそばにいて欲しいからだ。

孤独が好きで本当に孤独な人間等いないのだ。

孤独であればある程それが決してドラマや小説のように格好良いものなんかじゃないことに気付く。

孤独は所詮孤独なのだ。孤独は孤独でしかないのだと。

ただ心が冷たくなっていくだけだと。

心が冷たくなっていったことに、いつしか気付けなくなってしまい、最後には誰からも忘れられていく。

俺もそうになっていたかもしれないのだ。いや既にそうになっているのかもしれないし、これからそうなるのかもしれないが。

俺に自分自身の冷たさと、人の温度を思い出させてくれた少女。

体温が低い人が体温の高い人の手を握ると自身の体温の低さを初めて感じるように。

俺は彼女の温度に慣れてしまった。

彼女の全てを許す温もりと、全てを許さない冷たさに。

火傷しないように、凍りつかないように、その二つをうまく使い分けられる彼女だからこそ彼女の周りには人が絶えないのだ。

一緒にいることが誰に対しても苦とならない彼女は、

自らそうすることが得意な彼女は、

だからそれが例え孤独に好かれた人間でさえ、

孤独を愛した人間でさえ、

その閉ざした心の扉の鍵を彼女にだけは許してしまうのだ。

俺達がそうだったように。彼女の周囲の人間達がそうであるように。

本当に本当に今更ながら、何回も何回も思ってきたことを再び感じ直す。

彼女に出逢えて良かったと。自分が彼女を見つけられて良かった。

彼女がそれに答えてくれて本当に感謝しきれないくらい救われていた。

その想いだけは変わらないように、迷わないように絶対に忘れないようにしたい。

それさえできれば俺は大丈夫な気がした。

多くは望まず期待はせず、けれど希望は持って生きてみようか。

自分の首に巻いたマフラーを締めなおしていき、ブレザーのポケットから取り出した折り畳まれた携帯電話を鏡代わりにどう見えるか確認。

まだ冬のような晴れた空から日が傾き始める迄数時間あるだろうというところだが、雲一つない空の下は丸ごと冷蔵庫に閉じ込めたような寒さ。

咲く季節をまだ待っているように蕾のままの桜は学校の入学式のシーズンを通り越してもやっぱり蕾のままだった。

太陽がこの小さな島国の存在を忘れてしまったのではないか、

と思える程のこれはもはや異常気象ではないだろうか。

テレビのニュースで天気予報師が皆口を揃えて「今年は春を抜かして夏なんではないでしょうか」という始末。

異常気象は大震災の前触れだとかいうが、そろそろ地球も終わりなのか。

地球が終わったら俺も終わってしまうな。

それは普通に嫌だったが、それは普通に起きないことだとも思う。

平和に慣れてしまった俺達は自分が今いる所が平和でないど、

それに暗示をかけてしまい自分が安全なのだと思い込むことで、

自らの平穩を守ろうとしているつもりなのだろう。

でもそれは大きな間違いで、致命的な欠陥であることすら気付かない。

誰も気付かない。

いや。

誰も気付きたくないのか。

気付くことが恐ろしいから分からない振りをしているだけか。

そのこと事態を認識していようがまいが、それは襲ってくるとうのど。

・・・また無駄な思考を独り歩きさせている自分だった。

独りになり、独りじゃないときに一緒にいる奴に対して費やす思考を停止しているときには、

また別の思考が目覚めます。自分との会話とでも言うべきか。ずっと独りだった俺は人一倍それが、いうなら自分との会話をたくさんしていた。

要は考え事だけだ。

そういう奴程自分の考えに凝り固まってしまっ、自己中心的な人間になりやすいと思う。

自らが思い、廻らせてきた考えが間違っている等と夢にも感じない連中だ。

いつもはしない自虐に走ってみた。

自分を自分で傷つけるなんて非生産的な行為を、

害しか生まない行為を、

まるで格好つけたかのようにしている自分を好きになれなかった。

自分を自分で好きになれないなら、それは最悪だぞ。

死ぬ迄離れられない存在同士なのだから。

自分とはうまく付き合っていく他ない。

好きになれない奴と一生一緒にいたくなければな。

そうゆう意味だったらナルシストも悪くないかもしれない。

どうしても好きになれない自分と共倒れになって何もかも駄目にしてしまうよりは……。

自慢できるくらい自分に自信を持てる人間の方がどれだけ良いか。

どれだけ素晴らしいか知れない。

自分にはとても当てはまらないことだから。

これはあくまで想像の範疇での予想だけれど。

「すみませーん。××テレビなんですけど。インタビューお願いできますか？今都会の若者を中心に……」

いつの間に俺の正面に現れていたテレビリポーターを鬱陶しく思った俺は、

その女性リポーターの横を抜けていく。

無視されたことにようやく気付いた彼女は、軽く凹んでいる様子。

見ればまだ若い新人リポーターらしかった。

俺って本当に、むかつく程、嫌になる程、甘い。

「お仕事ご苦労様です。俺は大したこと言えないんで、すみません。」

振り返ってそう言っていた。俺の口から勝手に出てきた言葉だった。

ばあつと明るくなる彼女だった。

「こちらこそすいませんです。すいません。すいませんでした」

自分の中で罪悪感をいつまでも残しておかない為にしたことでしかない。

自分の感情をつまぐ整理できない自分のことを、

また一つ嫌いになってみた。

「じゃあ俺はこれで・・・」

カメラマンに映されでもしたらいい話の種だろう。

急いでその場を離れる俺。

一人で良かったと、今だけはさつき迄の自分に感謝。

あいつらの、特にショートカットの方が黙っていなかった筈だろうから。

相も変わらず歩き続けている俺だった。

歩きながらの方が考えがまとまるから。

こんなことはよくやることなのだ。

俺ってつままないあと改めてそう感じるのだった。

安西奏と会えない時間が続くだけでこんなにも、駄目になってしま
うなんて。

下らない自分を見下す自分がまた下らない。

もうやめよう。

考え事をやめる。思考を停止させてみる。

その方がきつと楽。

自分は考えなくていい惰性の安楽に浸ることにした。

思考のスイッチをオフに。

一歩一歩をいくことだけ感じながら考えることを止めた。

・・・やっぱりこの方が楽。

楽が一番良い。

13 / 続き続けて奏で続けて

それから、それからの毎日はまるで夢のような、夢を見ているように過ぎていった。

俺は朝起きて学校へ行く。一向に春の訪れを拒み続ける寒空の下を行く。

教室に入ると彼女達はいつもそこにいた。

例外無く、当たり前のように他愛もない話を二人して繰り広げているのだった。

そこに俺は混ぜられる。二人は三人になる。

二点は三点になり、線は三角になる。

たまに、極稀にあのツンデレ剣士がいたこともあった。

彼女の話では剣道部では日によって朝練があるらしい。

よって練習が早く終わると授業迄の時間が空くとゆうことらしく、

シカタナシに、俺達がいることが分かっているながら、シブシブ自らの教室に出向くとのことだった。

仕方なしに、渋々等のフレーズが変に強調されている気がしたのだ

が、

そこは彼女の性格を考えるなら意味を正反対にして受けとれば正解だろう。

時々四角になるわけだ。

一人は二人に。

二人は三人に。

三人は四人に。

三人時々四人で俺達は、毎朝をそうして過ごしていた。

楽しかった。なんて軽い、浅い、薄い表現の仕方だとは思う。

「楽しかった」では何がどう楽しかったのか分からない。

小学生の作文じゃないのだから。

幼稚園児が遊園地に行った後の感想じゃないのだから。

それでも俺は、きっとあの三人も、「楽しかった」のではないだろうか？

きっとそうだ。そうに決まっている。そうに違いない。

どこにでもありそうな、ありふれた関係。

人間関係、繋がり、友人、友達。

それでも俺達は、俺は、そんな自分達のことを特別だと感じている。世界中に宇宙中に腐る程存在しているだろう他のどんな繋がりよりも、俺達の方が上等だろうと。

最高の仲間だと。最上級の人間関係だと。

異性の壁を越えて考え方の違いを越えて、お互いに相手を受け入れ合える存在同士。

一緒に同じ場所に存在していることが一瞬たりとも苦となりえない存在同士。

今迄の人生の間で誰かに拒絶されることに慣れ、誰かを拒絶することに慣れてしまった二人に、

今迄の人生の間で誰かと繋がることを覚え、誰かに自分を偽ることを覚えた彼女と。

今迄の人生の間で最初から何も慣れることもなく、覚える必要すらなく、自分の存在を自らに認めたそのときから負けることを知らない彼女が加わって奏で始めた四重奏。

それは最初とても心地好い音色を奏でていただろう。

一流の管楽器奏者の一流の弦楽器奏者の一流のオーケストラの音色

に負けない位の素晴らしい音を、アンサンブルを。

でも俺達はまだ素人だった。

人と人との関わり合いについて何もかも分かっていたつもりになっていただけだった。

素人だから、まだ未熟だから一度崩れればもう手遅れだった。

もうもとに戻ることは不可能だった。

再び同じ音色を出すことはできなかった。

だってもう忘れてしまったから。覚えていないから。

音の出し方を忘れてしまったから。

もう帰る場所は無くなっていた。

どうしてだろう何処で間違った？

どこで道を間違えてしまったのだろうか。

何処かで見落とした筈だ。何処かで誰かが気付かなきゃならなかった。

気付いてあげなければいけなかった。

だからこれは俺のせいでもあり、あの二人のせいでもあるのだ。

いや。彼女にも責任をとらせるのは間違っているか。

彼女は常に線を引いていた。

淡野観月は俺達と関わり合うことはしても、自分はそれ以上近づいてはいけないラインを自分でつくってそれを律儀に守っていた。

だからこれはきつと俺と彼女のせい。

俺が間違いを犯し、彼女が気付けなかったから起きた失敗。

もうどうしようもない失敗。

絶望的に救いようのない絶望。

いやもう二人間違っていた奴がいたのを忘れていた。

俺としたことが、二人も忘れて過ぎだろう。全くやれやれだ。

一人は言うまでもなく彼女。俺達に助けを求めようとしなかった彼女。彼女が二番目に悪い。

そして一番悪いのは、憎むべき悪党は、恨むべき敵は・・・、やはり・・・、それは・・・、あいつであり、あいつ意外には有り得ない。

簡単に間違いを犯し、簡単に間違いを犯したことを忘れられる人間に、俺は何度も会ってきたが、

あいつはその中でも特に特。異常も異常。

最悪の中の最悪だった。

絶対に関わってはいけない存在だった。

関わってしまった今としてはもうどうしようもないことだけれど。

起こってしまった今としては、どうしようもないことだけれど。

奏で始めた不協和音は、まだ終わらない。

絶望は常に続いている。

関わり合った俺達を巻き込んで色んなものを巻き込んで、続く続ける。

終わりの無いそれは輪廻のごとく。

14 / 幸せの定義

「幸せって何かな。何だと思う××君？」

「幸せ？」

これはまたえらく哲学的で不確かだ。答の出なさそうな、それでいて物凄く重い質問だな。

幸せはなについて、それが分かれば誰も苦労しないだろう。

誰も苦しみはしないだろう。

まあこいつが俺に訊いたのはこの世の心理みたいなものじゃなく、要するに俺の意見を、俺がどう思っているか知りたいのだろう。

俺にとっての幸せがどんな形をしているか、知りたいのだろう。

「そう幸せ。でも幸せって言っても色々あるよね。人の数だけ幸せはあるよね。それは人によって幸せという概念の捉え方が違うから。十人いれば十の幸せが、百人いれば百の幸せがある。」

まあこんなものに歴とした答なんてないけど、ないからこそ皆欲しがるんだよね。やっぱり」

核心をついているような、いないような。

「幸せ、か。じゃあ訊くけどお前は今幸せか？」

「うーんどうだろ。幸せ、かな。結構幸せ。なんじゃないかな」

「結構ってどの位？」

「どの位っていわれても、結構としか言えないよ」

「その時点でもう面倒になってきたな。やっぱり数学みたいに確かな解答がないってゆうのはさ、実態のない自らの影を追ってるようなもんだろ。どっちかってゆうとそれは国語って感じた」

意味がないとは言わないけど。

意味があるとも言えはしない。

「そんなことは分かってるんだけどね。じゃあ訂正します。私は幸せです！」

幸福です！

私は私なりに幸せなんです！

どうだまいったか？」

いや参ったって、言われてもなあ。

「参らん。誰が参るか。参る要素が今の会話のどこにあった。……
まあでもそれでいいんじゃないかねえの？」

自分が幸せだと思えば幸せ。そうじゃなければ不幸。大事なのはそいつがどう思うかであって、そいつが幸せか不幸かじゃないんだよ。

ああでもこれじゃまるでパラドックスだ。幸せを自覚できなければ不幸で、だがしかしそれは紛れもなく幸せではある。けどそいつにとっては不幸。幸せは不幸で、不幸は幸せ。きりがなくて終わりもない。救いもない」

俺はじゃあどっちだ？

自覚のある幸せか、自覚のある不幸か、自覚のない幸せか、自覚のない不幸か。

それが分からないのは、俺は自分のことに対して鈍感であり続けてきたからだろうか。

自分に無関心で居続けてきたからだろうか。

「救いがないなんて、ことはないよ。」

安西奏はニツコリと笑顔。眩しいスマイル飛んできた。一瞬見とれる。恥ずかしながら。

「今君が言ったじゃん。幸せをそうだと信じる者は幸せなんですよ。じゃあそれでいいよ。私達は幸せだよ。信じられればそれは本当になるんだよつ。じゃあ幸せじゃんやっぱりあたしたちっ」

無慈悲で残酷で絶望的に救いのない現実を、少しでも忘れさせてくれる彼女だった。今はそういうことにしておけばいいかって、思わせてくれる彼女だった。

「全くお前は……安西は全く……。もう」

最高に幸せな奴だよな。お前は世界一、宇宙一幸せが似合ってるよ。そんなお前だからこそ……。俺はさあ……。まあなんだ……。

「好きだ安西」

「知ってまーす」

「うるさい。もっと教えてやる。お前の知らないことはまだあるんだよ」

「ふーん。別にいいけど、あつそろそろ時間だ。始まっちゃっよチケットチケット」

彼女は腕時計を見て焦り始める。本当だ。上映時間が迫りつつある。急いでジーンズのポケットから二人分のチケットを取りだし、一つを彼女に渡す。今話題の恋愛物のタイトルが刻まれたチケット。

まあそんなわけで、休日に俺達二人は新作映画を鑑賞する為に映画館に訪れていた。

きっかけは彼女。からの一通のメール。

「ひーまーだー。あーそーびーにーいーこーおー」

誰もいない自宅マンションで暇をもてあましていた俺にとっては願ってもない提案。断る理由は無かった。

ならばと日時場所を指定したメールを返信。一つ気になることを最後に付け足して。

「あいつらも来るのか？」

返信の返信を待つ。すぐにバイブレータが起こり、メール着信を知らせた。

「今日は二人で」

だそうだ。不覚にも笑みがこぼれた。

じゃあなにか……今日は……二人つきり、か。

彼女の時間を独占できると思うと、何か邪悪な優越感が込み上げてきた。

実際はそうであってもメールの中では平静を保つよう心掛ける。

「どこへ行く？」

「ええとね、ええとね。んーとね。」

メール一通丸々考える時間に充てていた。アホか。

「じゃあ映画見に行く」

「……分かった」

別に異議もない。彼女の提案に乗ったわけだ。

そうして今俺達はここにいる。

抜け駆けで彼女を独り占めだ。学校中の、世界中の彼女を知る者が死ぬ程羨ましがれる偉業を達成した俺だった。

休日の彼女は当然私服姿。

今時の女子高生とゆう感じのカッコカワイイみたいに決めていた。

俺にはよく分からないが、どうやら髪型も少し手を加えているようだった。

ショートカットの印象が強い彼女だが最近髪が伸びてきており、滅茶苦茶女性っぽさに拍車をかけていたのだ。

髪の毛は……長い方が……イイな……。

何はともあれシアターへの通路を目指す俺達。

途中係員にチケットの半券をもぎられて更に進む。進む。

シアターの向かって左側からの入場だ。

まだぎりぎり上映前らしく、あたりは明るく見渡せる。

良かった。始まってからだと暗くて危険だからな。

だかのんびりしてはいられない。今すぐにもそうなるかもしれない。

俺達は連番で丁度シアターの中心に位置する席にたどり着き、ようやく腰をおろす。

「うわーおっきい。スクリーン大迫力だっ。楽しみ楽しみ」

言っただけから抱えている、売店で購入したキャラメルポップコーンに手を伸ばす彼女。

「映画なんて久しぶりだ。」

「ふーん。私もだよ。最後はいつだったか覚えてないや」

ふーんそうなのか。

今になって気付くことがある。

彼女の顔が近い。彼女の吐息が時々触れる。彼女の髪の毛からシャンプーの匂いがしてきた。

こんなに幸せでいいんだろうか。こんなにも幸福で……いいのだろうか。

そんな些細な思考を働かせていると、フッと場内の明かりが落ちる。瞬間、左右のスピーカーから場内全体が振動するかのような大音響。一瞬だけ身がすくみ、もう一瞬ですぐに慣れた。

新作映画の予告映像が流れる。

観客を盛り上げるこのムード作り。全く、誰が考えているんだろうな。

予告だけの短い映像だが、興味をそそるように計算し尽くされている。

現に俺の横で既にテンション上がりまくりの安西奏だった。

一つ目はコミックスが大ヒットし、ドラマ化もされ、そして堂々映画化という一般受けが良さそうなスポ根物だった。

物語の起承転結を小出しに、絶妙に演出された映像はやはり見ている気持ち良い。

次はハリウッドの有名な映画監督がつくったというサスペンスアクション物。

海外で有名な俳優が多数出演しているとのことだが、俺には誰一人として分からなかった。

他にもいくつかの作品の予告映像が流され、ようやく本編が始まる。

映画制作会社のマークが現れ、そして消える。

「始まるよー」

「そうだな」

最初に映し出されたシーンは海が見える浜辺のシーン。

小学校低学年位の幼い男女が二人でいる所を見ると、どつやらこれは時系列的に過去の回想らしかった。

そこで二人は誓う。

これからの未来をお互いに約束する。

二人の未来を。

幼いなりに、未熟なりに背伸びして。

それを微笑ましげに、安西は見ていた。

もう既に完全に感情を移入してしまっている。話し掛けても、もう無駄なんだろうなあ。

仕方なく、俺も彼女に倣うことにした。

回想が終わり作品のタイトルが現れ、ようやく始まるというところで俺は物語に全身でのめり込む準備をするのだった。

今はそういう気分なんだ。

これが終わった後で彼女と感想を言い合えるように。

それを楽しみにする気持ちを自分の中の片隅に置きながらも、

物語は始まりを告げた。

それはまるでこれからの俺達のように。

15 / 俺の部屋にて

「うわーひろーい。それにキレイ。君の家お金持ちだったんだ？
びっくりだよ。オドロキだあ」

「そうか？ そんなに楽しくねえよ。こんな牢獄みたいな家に一人
だけだ。住めばわかるさ。俺の気持ちが」

分かって欲しいとは……思わないけど。

理解して貰おうなんて、思っていないけど。

「ん？ 一人？ お母さんとか、お父さんとかは？」

「あ……いや……」

しまった。口を滑らせた。

できれば秘密にしておきたいことだった。

「それは……」

「……そっか。分かったよ」

「……？」

「もういいよってこと。今はまだ話をなくていいってこと、だよ」
ああ、そうか。

これは彼女の、安西奏の優しさ、か。

ここは追及するよりも、知らないでいることを選んだ。

知らないでいてくれるだけで、こんな俺がどれだけ救われることが
……分かってくれている。

「……悪い。その……ありがとう、とう」

彼女のそんな優しさに、俺はまた素直になれた。

俺はまた一つ自分を好きになってみた。

「ん？ なんのことかな？ よく分からないけどなあ。あはっ」

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

お前と出逢えて本当に良かった。

こんな小さな俺なんかを、見捨てないで救ってくれてありがとう。

「……まあいい。廊下で立ち話も難だろう。こっちだ」

「はい」

場所は自宅。時間は夕方。人数は二人。俺、安西。

なんといいことはない。映画館を後にした俺達は、駅前のデパート
街で適当に時間を潰していたのだが、

「××君の家に行きたいっ。ねえねえねえー。いいでしょいいでしょ？ 行こうよ行こうよっ」

俺は彼女に振り回されてばかりだ。彼女の言うことをきいてばかりだ。

けれど、今はそれが普通になっていた。

今はそれが嫌じゃない。

まあいい。

……こうして彼女を我が家に招き入れたわけだ。

いや最初に招待するときはいくらも、神田とか淡野とかが一緒だと思っていたから。

二人きりになるとは思っていなかったから……。

少なからず、少ないながらも、少なくとも意識してしまうんだって。

仕方ないだろ。だって俺は、こいつのことが好きなんだから。

どうしようもなく、惹かれているのだから。

「あれー？ ここは何の部屋かな？」

俺が目を離れた際に廊下から繋がる扉を見つけて手をかける彼女。

……俺の部屋。っておい。

ガチャリ……

止める間もなく部屋内に侵入する彼女。あーあ。

「んー？ あつもしかしてもしかすると？」

俺の方に向き直る彼女。

もしかしなくても紛れもなく俺の部屋だよ。

「勝手に入るな人の部屋に」

嫌な予感が猛烈に込み上げてくるのは恐らく気のせいなんかじゃないだろう。

パチッ

部屋の電気のスイッチを入れた音がする。

「突入ー！ ゆけゆけーカナデ探険隊っ まだ見ぬ秘境をめざしてっ！」

「……お、おい」

探険隊つてお前一人だろうっ。

……じゃなくて。

勢いよく部屋内を物色し始めた彼女を追って俺も既に開けられたドアをくぐる。

「やめろっ！ お前は空き巣かつ！ プライバシーだプライバシーを考えろっ」

彼女の肩を抱くようにして暴走を止めようと……した迄は良かったのだが、なんというか、場所が悪かった。

場所が……。

ベッドの真横じゃなければ、ただのふざけ合いでしかなかっただろう。

冗談で済まされていたに違いない。

「……………」

彼女も己が今置かれている状況を理解したらしく、普段はそうは見られない赤面になっていた。

そんな彼女の表情は変に魅惑的で誘惑的で、俺を迷わせた。

狂ってしまいそうだ。これ以上見つめていたら。

俺も彼女と出逢って間もない頃には勘違いしていたのだが、彼女はガードがゆるいように見えて実はそうでもない。

むしろ鉄壁だ。難攻不落。

だから、彼女のそんな表情はめちゃくちゃレアなんだ。

「……悪い」「……ごめん」

お互いに謝り合う二人。

「……ああ」「……うん」

お互いに許し合う二人。お互いに許し合って、お互いに分かり合う。

二人の他に誰もいない部屋の中でそんなことをしていた。少し落ち着いた後、二人は身体を離す。

つまり暫くの間二人は抱き合う形になっていたわけだ。

そのときの俺はどんな顔をしていたんだろう？

どんな顔を彼女に見られていたんだろう？

訊いてみたい気もするし、訊かないほうがいいような気もする。

ちなみに彼女はほのかに赤みがかかった顔だった。

間近ですつと見つめていたたい衝動に駆られるような、儚くてそれでいて可憐な色をしていた。

今にも崩れてしまいそうな、そんな色を。

していた。

彼女は急に、唐突に話し始める。

「あのさ、一つだけ訊きたいことがあるよ」

「……なにが？」

「君が私に初めてかけた言葉。君と私が初めて出逢ったときのこと……」

俺と安西が初めて出逢った……とき。

「こつ言った、よね。どうして無理してまで人気者でいたがる振りしてるの？って」

ああ。言った。覚えてるさ。昨日のことのように。はっきりと。

「あれってどうして？ 何で私が無理してるって思ったのかなって……」

……それは。

「いや、別に深い意味とか確かな理屈とかがあるわけじゃ、なくて俺には理解できなかっただけ……なんだよな」

「……どつゆじこと？」

「ほらさ、お前なら分かると思うけど俺って他人と関わり合うのが苦手なんだよ。他の奴らがどつやってお互いに分かり合えるのかが分からないんだ。」

それは生まれながらにして俺には無かったもの。

俺とその他大勢との違い。差別。区別。

欠落した思考。見解の相違。

どうすれば、自分のことを理解してくれるのか、相手のことを理解できるのか。

どうすれば相手のことを好きになれるのか、自分のことを好きになっ
てもらえるのか。

そういつたことの捉え方、感じ方、考え方が人とは違うのだ。

自分はそう思っている。

自分が人の輪に要領よく入っていけないのは、だからそういうこと
だと。

自分はそう納得して全部諦めてきた。

いつしか自分は色々なことを諦めて生きていくことを覚えた。

そうしないと前に進めないから。

分からない数字をXに置き換えて、計算を続けていく方程式みたい
に。

それで何かに気付いたり、何かが変わるかもしれないと思ったから。

でもそれは大きな間違いだった。

だって、俺は、そうだろう。

前になんか進んでないじゃないか。

何も分かってなんかいないし、何も変わってなんかいない。

お前はまだスタート地点でうずくまっただけじゃないか。

「……だから、なんの違和感もなく無造作に自然に、他人と分かり合える安西を初めて見たとき、俺は逆に違和感を感じたんだよ。……そんなことが有り得るのか？って」

目の前で繰り広げられている現実に疑問を抱いた。

人と人がそんなに簡単に、容易に、簡潔に分かり合えるなんて。

そんな馬鹿なことが……ある筈がない、と。

「……」

彼女は真剣だった。俺の真剣な言葉にただ耳を傾けてくれていた。

「だから俺は、お前が無理してそうしてるんじゃないかって思った。……少し違うな。そうせざるを得ない理由があるんじゃないか？ そう感じた」

彼女はようやく、その口を開く。

「……そっか」

「そんな知った様なことをって無視してくれていい。気にしないでいい。どうせ的外れな俺の思い違いだ。だから……」

「ううん。そんなことない。当たってるよ。君はちゃんと本当のことが見えてる」

「……？」

俺が毎日寝起きしているベッドに腰かけて、彼女はそう言った。

改めて思うが、女とベッドっていう組み合わせは何か……妖艶な感じだ。

「当たってるって？」

「……いや何でもないよ。気にしないで。今のはお互いに忘れよ。お願い……」

「……？ ああ……。そこ迄いうなら、別に俺は……」

なにか気まずい空気になってしまった。

俺が悪かったのだろうか……？

彼女は何かを隠している……？

……もしそれでも、俺は彼女を責めることはできないか。

だって彼女は、俺に何も訊かないでいてくれたじゃないか。そうだな。ここは、彼女がそう言うなら何も訊くまい。

何も訊かないことが、ここでは最上級の優しさ、だ。

「……よし。もうこんな時間だ。晩飯にしないか？ 俺が何かつくるから、さ」

「ええー！ ホントっ？ 食べたいっ。××君の手料理だー。やったー」

俺のそんな一言で、彼女は花畑のような満面の笑顔をやっと取り戻した。

良かった。その方がやっぱりお前らしいよ。

「ああ。本当だ。何なら好きな物を言ってくれ。お前が今迄食べた中のどれよりも美味しいのを食わせてやるよ」

「わーい！ やったー！ じゃあね、じゃあね……ええと、ええと……。」

彼女は暫く思考を重ね、決まった！という風に両手をパチンとした。

「卵焼き！ もう一回食べたいよ！」

「卵焼き？ それだけか？ そんなの味気ないか？ 卵焼き一品だけの夕食なんて……」

「いいのっ。この前はアズみんとか淡野さんにもあげてたじゃん。君。だからさっ、だからさっ……」

彼女は一瞬、大人っぽい空気を纏わせて続ける。

「……………今度は私の為だけにつくって」

……………はっ、なんだ。そんなことが。そうゆうことなら……………。

「分かった。今日はお前だけの為につくる。安西に食べて貰う為につくろう。卵焼きで……………いいんだな」

「うんいいよ。早く早くっ」

「分かったから、少し待ってる」

本当に、俺は彼女の言うこときいてばかりだなあ。

そんなことを思いながら、キッチンの冷蔵庫に向かう。

卵、まだあっただろうか？

16 / 彼女の為ならば

「アズみんっ。おはよっ。」

「あっ。カナデおはよ」

ぱしつと背中を叩かれ、飛んできた挨拶に私は、挨拶を返す。

私をその呼び方で呼ぶのは一人しかない。

それを抜きにしたって、聞き慣れた友人の声を忘れるわけもなく、その声で自分のことを呼んでくれることにむしる感謝してしまうような、綺麗で美しいバイオリンのような声の知り合いはやっぱり一人しかないのだった。

「こんなところで会うなんて、運命かな？ 運命なのかな？ 私とアズみんの切っても切れない絆のおかげかなー？」

「……そんな大げさな。偶然だよ。毎日通ってればそういうこともあるって」

それもその筈。私やカナデが通う高校は、もう目と鼻の先。

という程でもないが、もう見えてくるくらいだろう。

どちらかといえば都会に位置する私達の学校は、駅からそう離れていない。

交通の便の良さは学生の人気の一つで中々の有名高だ。

その上、そんなに勉強しなくても普段の努力を怠らなければ楽にパスできる入学試験なども相まって、入学志願者が絶えないという面白い学校だった。

中学生から受験勉強なんかで青春を灰色に染めたくなんかない、という人達に担任の教師がそれなら、と勧める学校で、それはそれで需要はあるみたいだ。

まあ、ぎりぎり迄重要な選択から逃げて逃げて、向かい合えない人達なのかも、しれないのだけど。

それは私も同じようなものなのだし、自分のことを棚に上げて勝手なことは言えないか。

「ふあゝ。眠いや。毎日早起きするようになって、私そんなに朝強くないんだよね」

「へゝ。そういえば××君もそんなこと言ってたかな？ アズミンは朝弱そうだって。そんなこと言ってたような……」

ふうん。なんでかな？ 私そんなふうに見られている？ いや実際そうだけどさ。

「でもカナデは違うよね。布団から出たときと学校で私達と話してるときのテンション同じでしょ？」

「あゝアズミンひどい。そんなことないよー。私だって朝起きたら可愛くあくびしたりするよ。くあゝって」

アハハ。アハハ。アハハ。

そんな他愛もない朝の会話をしていた。

そんな些細なことがこんなにも、楽しい、嬉しい、充実していた。

こんな平和な日々が、こんな夢みたいな日々が、いつまでも続けばいいな。

きっとそうなるよ。きっとそうなる筈。きつときつと大丈夫。

そんな未来が私を待っているのだと、私は私に言い聞かせる。

そうすれば、きっと本当にそうなると思って。

「もう××君いるかな？ 淡野さんはいるかな？」

「淡野さんは分からないけど、××君は来てるかもね。」

「そうだといいな〜」

「そうだといいな〜」

そんなことを話しながら、私達は学校を目指して歩いている。

もう見えてきた。早く行かなくちゃ。彼や彼女が待っているかもしれないから。

彼や彼女を待たせてはいけない。

独りぼつちでいることがどれだけ寂しいことか、どれだけ悲しいことか、どれだけ苦しいことか、私は知っているから。

だからこそ、私は皆に優しくできるのだと思う。

その辛さを知っているからこそ、その苦しみを知っているからこそ、本当に追い詰められている人に手を差し伸べてあげられるって、私は信じているから。

それを気付かせてくれた彼女の隣を今日も歩くんだ。

私はこれから彼女にいったい感謝しなければいけないな、と思う。

彼女がもし本当にどうしようもなく追い詰められているときに、私が側にいて彼女を救ってあげられればいい。

……でもその役目はもしかしたら、私ではないのかもしれないけれど。

「うー寒いよ。もういつになったら春が来るのかな？ もう四月も終わる頃なのに、今年の新生活が可哀想だったな。とうとう桜、見れなかったよ」

「そうだね。可哀想。春も酷いことするよ。」

ようやく私達は校門に到達。

早朝からご苦労様だ。警備員のおじさんに挨拶をした。

おはようございますって。

そのまま私達は、馴染み深い教室の存在する校舎を目指し、到達。

下駄箱に通じるドアを開き、まだ人気の無い校舎に足を踏み入れる。

「早く教室いこ。ストーブきいてるかな」

「そうだといいいね」

何気なく、自然に、彼女は、安西奏は自らの上履きが入っているだろうロッカーに手をかける。

そして開けた。

開けて、そして……

どぞ。

私は一体何が起きたのかと目を疑った。

私は一瞬、彼女がロッカーを開けたのにも関わらず、そこにあるべき空間が見えないことに驚いた。

え？……なん、で？

それは錯覚だった。なんというか見間違いだっただ。

だって、そんな異様な状態にロッカーがなっていることなんて私は見たことがなかったのだから、それも責められることではない。

「……………」

私はどうしていいか分からなくて、それでも私はその手紙の中から一つを取り上げて開封。

彼女の顔を伺ったけれど、別段嫌がるような素振りを見せなかったので、少し安心して中身を確認。

すると。中には、最悪しか無かった。

「うっ……………」

私の中でそれが何なのかを理解して、私は手紙を取り落とす。

指から逃げるように重量に逆らわない紙片。

それは彼女への、安西奏への紛れもない敵意で攻撃だった。

「お前の全てを呪ってやる。お前の運命を呪ってやる。お前の人生を呪ってやる。お前の未来を呪ってやる。お前の過去を呪ってやる。お前の家族を呪ってやる。お前の友達を呪ってやる。お前の恋人を呪ってやる。……………を呪ってやる……………を呪ってやる。…を呪ってやる……………」

それはどこまでも続く、それこそ呪いのような地獄の言葉だった。

終わることのない、永遠のような絶望を感じる文字の連なりだった。

そこには何も無い。ただ最悪があるだけだった。

最低しかなかった。最低の最悪があるだけだった。

「これは……」

きつと、他の手紙にもこれと似たような、全く別の敵意が刻まれているのだろう。

同じ人間の、全く別の形での敵意が刻まれているのだろう。

そう思うと私は吐き気がした。誰がこんなことを……。

……絶対に許せない。

驚愕は一瞬で、簡単に敵意に変わった。

私は彼女を苦しめているであろう存在に、今も彼女が苦しんでいる事実を嘲笑っているかもしれない存在に、容赦の無い敵意を向ける。

「……まあ、そういうことなんだよね」

「そういうことって……」

彼女はそれでも笑っていた。本当に笑える程、可笑しいわけがないのに。

本当は苦しくて、泣いてしまいそうな筈なのに。

……それでも笑っていた。

「……ダメだよアズミン」

「…………え？」

彼女の突然の言葉に、私は面食らった。ダメってなに？

「これは私が自分で解決しなければならぬことだから、アズみんは巻き込めないよ…………」

「…………でも」

私は気付いた。私は誤解していた。

彼女の笑みは、決して嘘なんかじゃなかった。

彼女は心の底から、笑っていた。

それは勝利を確信しているような、自分を一切疑うことのない目だった。

「でも…………先生とかに助けてもらうとか…………」

「それもだめ。これは私の問題だから、私が自分でやらなきゃいけないことなの。…………お願いだよアズみん。少しいいから、待つてくれないかな？ 私の為に待つてくれないかな？」

彼女の真剣さに、私はこれ以上追及することの無意味を理解した。そして、仕方なく…………

「…………うん。カナデがそう言うなら…………少し、ただだよ」

私にはそう言うことしか、今の私ではそれしか彼女への言葉を持たなかった。

本当に悔しいけれど。

「ありがとうアズミン。ありがとね」

彼女は私に感謝する……。今の私に、そんな資格なんか無いのに。

「……その代わり、何かあったら絶対私に言ってね。約束、だからね」

そういうことしか、できなかった。自分は本当に弱い。

「分かってるよ。友達じゃん。そんなの当たり前だよ」

「そっか……ならいい」

その場は仕方なく、それ以上話すことは無くなってしまったので、私達でロッカーから溢れてしまった手紙を集めて破ってゴミ箱に捨てた。

その作業をしているときでも、彼女はその表情を崩さない。

彼女が頭の中で何を考えているのか分からなくて、少し怖かった。

その後で私達はようやく教室へ向かう。

そうだ。私は、この後彼や彼女にどんな顔をして会えばいいのだろう。

彼女は当然のように、何があつたのか私が二人に打ち明けることを許さないだろう。

私は、二人を騙してこれからいかなくってはならないの？

そんなことを想像するだけで、この身が消えてしまいそうで怖かった。

でも、それでも、これは彼女の為なんだ。

彼女を助ける為なんだ。

彼女を助ける為ならば、私は嘘も吐こう。

彼女がそれを望むのなら、私は嘔吐きにもなるう。

彼女の為なら、どんなことでも怖くない。

よし私は頑張れる。彼女の助けに、やっとなれるんだ。

17 / 友達だから

「あいつら遅くないか？ いつも二人して誰よりも早く教室二人占めしてるだろあの二人」

「……まあ確かに、そう言えばそうね……」

「……」「……」

ところで、だ……。

なんだろうこの空気は。このなんとも言えない虚しさは……。

「遅いよな。あの二人……」

「そう、ね……」

ふう、どうしてこうなってしまっただろうな。

まあ、こいつと正面切って二人きりで、水入らずの一对一でいるのは初めてだけれど、それにしたってここ迄違う物だろうか。

一対一でも、周りに誰かがいるときには何の問題もなく接することができるのだが。

周りの喧騒が無くなってしまっただけでどうしてこつも変わってしまったのだろうか。不思議である。

いや、その理由というか、原因のようなものに少なからずの心当た

りがないわけではない。

簡単だ。彼女が俺を避けている、ような気がする。

というか上手く言葉で表せないが、それでも無理矢理に表現するならば、つまりはそういうことになる。

まるで俺に話し掛けられるのが怖い、みたいな。俺に話し掛けて欲しくない、かのような。

そんなオーラを全身で感じてしまうのだ。俺の勘違いであって欲しいことではあるけれど。

俺は彼女みたいな奴のことをどうしても嫌いにはなれないから、むしろ好きだ。

恋愛感情とは少し方向が違う好意、である。

ベクトルが違う感情だ。好意というよりは憧れ、のような感じなのだ。

自分に迷うことなく、自分を迷うことなく、真っ直ぐにひたむきな彼女はもしかしたら、俺がそうありたいと願っていた理想の人間なのかもしれない。

こんなふうに自分を周囲に振りかざすように颯爽と「生きていく」ことができたら、さぞ気持ち良いことだろう。

自分には絶対に無理なことだから、できない生き方だから、彼女のことを羨ましいとさえ思う。

安西奏が万人に好かれる人間ならば、淡野観月は万人に頼られる人間だ。

さすがは委員長、今では既にクラス中にその存在を、実力を認められており、何か問題が起こる度に彼女がそこへ赴いては、あっという間に片付けてしまうのだ。

とは言え、俺達は既に高校生、半分はもう大人。

高等学校迄きて殴り合い、蹴り合い、取っ組み合いの子供のような喧嘩等起きる筈もない。

大抵は平和的な問題である。例えば「淡野さん、これどこに貼ったらしいかな?」とか、

「淡野さんこの問題が分からないよ〜」とかいう感じだ。

このクラス自体が優等生というか、人畜無害の集まりだということ。を差し引いても彼女は良くやっている。

既にクラスにとってなくてはならない存在だ。必要不可欠な人間だ。彼女自身が魅力的な人間だということもそれを手伝っている、

綺麗に整った顔。形の良い小さな輪郭。サラサラのセミロングの髪の毛。

そして男勝りなルックスがそれら全てをひっくり返し、この美少女は何もかも格好良い。

眼鏡が似合う、インテリ美少女。

委員長であり、剣道部の主将であり、なにより頼れるお姉さん、と
きては異性からも同性からも好かれぬ訳がなく、当然のように安
西と同じく人気者に落ち着いている彼女。

しかし、皆と仲良くするというよりは、クールに冷静沈着に淡々と
人間関係をこなすというイメージ。

いつでも自分と周りとの間に線を引き、その上で他人と付き合っ
ている彼女。

そんな彼女のことを、俺はやっぱり嫌いじゃない。

「……ところでね」

「……何よ？」

あまりにも退屈になってしまい、さすがに痺れをきらした俺はそん
なことをきいてみた。……少し興味があった、のかもしれない。

「……淡野って彼氏とかいるの？」

「な、なんでそんなこと、きくのよ？」

「いや、なんとなく……」

「か、彼氏なんて……」

心無しか、彼女の顔が紅くなっているような気がするのは、俺の都合の良い思い込みだろうか？

「彼氏なんていない……。いたことないし……」

「へえ。意外だな」

モテるだろうに。こんな美少女を放っておく程に、こいつの生きてきた道には目の節穴ばかりなのだろうか。

「……そんなの考えたことないし、私は竹刀振ってれば良かったし……」

彼女にしては珍しく、うろたえている様子。彼女らしくもない、そんな顔をするなんて。

まあしかし、彼女のことをまだ半分も知れていない俺がそこ迄言うてしまうのは、結論を急ぎすぎだろうか。

俺のまだ知らない淡野観月という人間を、新たに知ることができたのかもしれないのだし。

「……それに、彼氏なんてバレたらお父さんになんて言われるか……考えたくない……」

「お父さん？ バレたらどうなるんだ？」

「……殺される」

「殺さ、れるだって？」

「……その相手が」

恐いつ。恐すぎるっ。……つまりはあれか。

彼女の父親は、彼女を誰にも渡したくないと……いうわけか。
我が娘が、目に入れても痛くないと、いうわけか。

「ちなみにお父さん、私より強いから」

「強いつてなにが……」

「剣道に決まってるでしょ。家、道場なのよ。」

「ああ成る程。そうだったのか。家が道場ねえ」

それが彼女の、淡路観月の他者と一線を画す強さの理由か。

家が道場。生まれたときから剣士になることが、決まっていたのだ。

それが人として、一人の女性としての幸せかどうかは俺には分からない。
ない。

だけど、少なくとも彼女を見る限りでは不幸ではないだろう。

「それは、凄いな。……大変、でもあるか」

「別に……私にとってはそれが当然で、当たり前だから」

それはそうだろう。俺だってそうだ。

俺にとっての日常は、誰がなんと言おうが、誰に否定されようとも俺の中ではそれが普通なのだ。

俺にとってはそれが当たり前。ずっと独りが当たり前。

……だった。ついこの前は、

彼女に出逢う、そのときまでは。

「……じゃあ、××は彼女とかいない、の？」

「俺？」

彼女は座っていた机の椅子から立ち上がり、教室の窓側に向かって歩きながらそう言った。

「俺は……今は……」

俺に彼女と呼べる存在は……。

「……今は、いない」

「そっか……いないんだ……」

その彼女の顔は教室の窓に向かっていてこちらからは窺えないが、なんとなく嬉しそうに、安心して見えるように見えたのは……どうだろう、やはり錯覚なのか。

都合の良い思い違いなのだろうか。

「それじゃあ、ええと……その……あの……」

「……？」

ガラツという教室のドアが開かれる音に、彼女の次の一言は呑み込まれることとなった。

彼女の言葉を最後迄きくことは、ついに叶わなかったのである。

何を言いかけたのだろうか？

「暖かい。幸せ。ほらほらアズみんなもはやく」

「わゝ本当。あつ、二人ともきてた」

「お前らにしては、遅かったな。なんだ待ち合わせでもしてたのか？」

二人同時、という点に俺は疑問を抱き、先頭でドアを開けて入ってきた安西にそう問い掛ける。

「ん？ いやいや違うよ。偶然そこでバツタリしちゃったわけですよ。これって運命？ ××君羨ましい？」

「良かったな。勝手にやってな。神田、朝からこいつの相手するのは大変だったろう？ ご苦労だったな。まあ座れ」

「え、ううん。大丈夫、だよ」

「あゝ、××君ひどい。なんで二人していじめるのよ。アズみんとおんなじようなこと言ってる」

「俺達はお前とは違う。朝からお前の滅茶苦茶に付き合いきれないんだ。一人で暴走してる」

「あゝもういいよ。だったら……」

そうすると彼女は対象を変更し、窓際から俺達のやり取りを眺めていた淡野に照準を合わせるように、近寄って……。

音も無く、忍び寄り、彼女の身体に抱き着こうとして……そして……。

「やめろっつ……!!」

……え？ 何だ？ 彼女は、淡野は何故か感情を高ぶらせて叫ぶ。絶叫して、いた。

ズバァッ

風を切るような音がしたかと思えば、彼女が安西が頭を押さえて戸惑っていた。

まるで、頭を思い切り強く殴られたかのような、何故そうされたのか理解が追いつかないでいるかのような、そんな苦悶の表情をしていた。

そして恐る恐る彼女の方を見つめる。

淡野が竹刀を振り抜いていた。いつの間にか、手には竹刀。

顔に激昂の成り損ないのような表情を貼り付けて、容赦の無い暴力を安西に向けていた。

一体、何を、しているんだ……お前は……。

「淡野。お前何、して……」

「……っ！」

彼女は我を取り戻したかの様に自分が今したことを理解し、そして……表情を歪めてただ立ち尽くすのみ。

「……い、痛。痛いよ。痛い。酷いなミズキ。ちょっとふざけた、ただだよ」

「……あ、あ、ああ、私……なんで……こんな……」

彼女は竹刀を投げ捨てるように取り落とす。

カランという音がして、彼女がその場に崩れ落ちるのが同時だった。

俺はその一連の異常を、ただ呆然と傍観していた。

何だこれは？ なんなんだこの馬鹿げた筋書きは……。シナリオがあったかどうかも疑わしい、「冗談で済まされない冗談が、今まさに、俺の眼前で起きてしまった。

いや、これはまだましだ。まだ取り返しがつく失敗だ。間違えるんじゃない。お前。何を指をくわえて黙っているんだお前は。何をし

ているんだ。馬鹿かお前は。さつさと動けこの愚か者。この状況を誰が打開するんだ？

「安西大丈夫か？」

お前だろうが××。お前意外に誰がいる？

「……えっと私は、大丈夫、だけど……」

「そう良かった。」

「……う、うん」

そして、俺は彼女のもとへ。この場で今一番助けを求めているだろう彼女のもとへ歩いて行き、うずくまって震えている彼女と目線を合わせるようにその場に膝をついてこう言葉をかけた。

「淡野大丈夫か？」

すると彼女は怯えたように俺と目を合わせると、そしてだんだん顔色が戻っていく。表情が僅かに緩んだ。良かった。

「わ、私……ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……」

「いいよもう謝るな。お前は謝らなくていい」

「え、え……？」

ここは、この場では彼女に最大の助けを、最高の希望を、俺ができ

る限りの優しさを、彼女が再び立ち上がる為の力を、彼女の強がりの笑顔をもう一度、取り戻す為に。

「もう大丈夫だ。良かった。もう大丈夫だ。良かった。取り返しがついて、良かった。やり直しができる、良かった。良かったな。淡野観月。お前のことを誰も責めたりしない。後はお前がどうするかだ？」

俺の「良かった」をきく度に、少しずつ、少しずつその顔を上げる彼女。

そしてその綺麗な顔に一筋の涙が流れているのが見てとれた。

ごしごしと手で涙を拭う彼女は、いつもの淡野とはまだ遠かったが、それでももう大丈夫だろう。

「安西さん……ごめんなさい。私、どうかしてた。頭、大丈夫？痛かったでしょ？ 本当にごめんなさい。……私のことを、許してくれる？」

「大丈夫だよ。気にしない気にしない。……ミズキも人並みに女の子だったんだね。安心、したよ。」

「……あ、安心？」

淡野は、安西がそう言うと、疑うようにそうきいた。

ふう、そうだよな。それはそうだよな。彼女を助けられるのが俺だけなんてことはなかった。

ここにもう一人、どんな奴でも相手が宇宙人だったとしても仲良く
なってしまうかもしれない、友達全てが親友で恋人だと思いいこんで
いる、安西奏がいるじゃないか。

ハハ。バカじゃないだろうか俺は？ 一人で思い上がってまるで道
化だ。

でも、それでも哀れなピエロにでも、できることはある。今、彼女
に手を差し伸べることが、できる。

彼女を救い出すことが、できるじゃないか。

「ミズキも私達とおんなじで、何処にでもいる普通の女の子だって
面をつけて、竹刀を握れば最強の剣士になるかもしれないけど、そ
うじゃないときは、落ち込んだり、何かに当たりたくなるときもあ
る可憐で儚くて、でも強い女の子なんだって知ることができたから
っ。私は嬉しいよっ教えてくれてありがとうっ」

「何で、そんな、私、酷いことをした、よ……。暴力を振るったん
だよ？ それに理由をきかないの？ 私がこんなことした理由っ。
なんで安西さんのことを叩いたのか、剣道をやっている私が、面も
つけない、竹刀も何も持たない丸腰の女の子を、一方的に打ちのめ
した、そうするに値する理由を、私にきかないのっ……？」

「きかない」

同時だった。俺と安西、二人の言葉が重なって強い想いになって彼
女に向かってゆけ。淡野観月に分らせてやれ。

「なんでっ？ どうしてっ？ 私は、暴力を、……」

「友達だから」「友達だからだよ」

今度はタイミングがずれはしたが、言いたいことは全く同じ。俺と安西は、同じことを思っている。

「友、達？ ……それ、だけ？」

「それだけだ」

「そうだよ」

「友達……」

俺達がいいたいことはそれだけだった。俺達は、彼女に伝えるべきことをちゃんと伝えたいと思う。

彼女もそれをちゃんと、しっかり分かっていると思う。

とにかく俺達は、そこで他のクラスメート達がやって来て話しを中断することになった。

それ以上続けることはできなくなったのだ。いやもう充分だと思うけどな。

そんな淡野は俺の隣の彼女の机につき、ぼんやりと前を向いて座っていた。

そして俺と目が合うと、気まずそうに目をそらす。

あれ？ またどうして、周りに人がいるときには大丈夫なんじゃないか？
あったのか？ 果たしてどうということなのか。まあいいか。

とにかくそんな感じで、淡野観月は、正式に仲良しメンバー入りを、
果たしたことに、……やっぱりなるんだらうなあ。

また友達が増えた。

まあ、竹刀を置いて話す分には面白い奴だけだなあ。

18 / 愛と憎しみと殺意と

私は二人みたいに彼女に語りかけることはできなかった。

目の前で崩れ落ちていた彼女に手を差し伸べることは、できなかったのである。

私はその一部始終をただ、傍観者のように静観していた。

二人の言葉に段々と生気を取り戻していく彼女。

孤高の絶対最強は、実は人並みの感情を持った、何処にでもいる一人の少女だったのだ。

それにしても、やはりそれでも一つの疑問。わからないことがある。

そんな彼女が、自分を制御できなくなるまでの理由とは何だろう。

感情に身を任せ、我を忘れて暴走してしまう程に彼女を揺さぶった理由とは一体なんだろうか。

衝動的に暴力を行使した彼女の中では、どんな思考が渦巻いていたのだろう。

彼女は強い。だからこそ誰よりも自らを制御する術を、感情をコントロールする方法を知っていた筈なのに、そんな彼女を狂わせた原因はなんだろう。

少しだけ興味がある。だって、あれ程迄に強かった彼女が、誰にも弱さを見せなかった彼女が、あそこ迄滅茶苦茶になってしまうなんて、少し面白いじゃないか。

何だろうなあ？ その理由、その原因、その要因は何だろうなあ？

ああ、自分は何を考えているのだろう。最低だ。人が一人苦しんで苦しんで潰れそうになっているのを、あろうことか楽しんでいるなんて。

最悪だ。劣悪だ。こんなことでは彼女の側にいることは許されない。

彼女の友達でいる資格等無い。

でもカナデなら許してくれるよね？ こんな救いようのない私でも、見捨てないでくれるよね？

カナデだけは私の味方でいてくれるよね。

カナデ、だけは、私を信じてくれる、……よね。

それにしても、……それにしても××君はすごいなあ。いいなあ。

カナデと同じ世界で、同じやり方で淡野さんを救い出すなんて、救うことができるなんて本当に羨ましい。

カナデ自身が暴力的になり、カナデに冷静な判断を失わせたことが確かにあるとはいえ、彼は凄いと思う。

今迄ずっと独りだったんだよ彼は。私と同じで、ずっと独りだった

筈なのにどうしてあんなことができたのだろう。

他人を理解できなかったのにどうして他人を救うことはできるの？

いや、違う。彼はいつ迄も過去の彼じゃない。孤独に付きまとわれ、振り切れなかった彼ではもうないのだ。

彼は成長した。安西奏という人間に触れていく内に、彼の中の何か、が少しずつ変わっていったんだ。

安西奏にはそういう力がある。誰かを繋ぎ止める力を持ちながら、誰かを変える力も持っているんだ。

もう彼は私と似た者同士ではないのだ。

私なんかよりずっと上等で、私なんかよりずっと誰かの痛みが分かる人間なんだ。

はは。羨ましいな。本当に羨ましい。今、彼はカナデと同じ場所に立っている。

そしてカナデも、彼のことを認めている。

嫌いな人とは仲良くなれても、好きにはならないのがカナデだ。

どんなに自分と相性が悪くても仲良くはなれる。なれるけれど、好きになることは絶対がないのが彼女。

安西奏という人間の正体だ。

彼女はきつと彼を選ぶ。一つしか選べないときは彼を選ぶだろう。
他の誰でもない、私でも淡野さんでもない、彼を選ぶんだろうな、
きつと。

まあ、女性の本当の幸せは、想い人と添い遂げることだから、……
最終的には彼の唯一無二になるべくしてなるのだろう。

きつと彼女も、彼もそれを望んでいる。

私もそうなることを願っている。いる筈なのに、……なのに。

嗚呼、何だこれは……苦しいよ。こんなに胸が苦しいのは何でだろ。
こんなに嫌な気持ちなのは何故だろう。こんなにも、こんなにも……
憎いのはどうしてなんだろう。

嗚呼、嫌だなあ。彼がカナデをどこか遠くに連れて行ってしまふ。

……そんなのは嫌だ。

そんなのは許さない。絶対に許さない。

私は許せない。カナデを取られてたまるか。彼女を私から盗む気？

彼女を私から取り上げるの？

そんなの、そんなの、駄目に決まっている。

嫌だ、嫌だ、認めない。ふざけるな。

ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな××。××××××××××

私がもう二度と笑えなくなっても、カナデはそうなつては駄目。

カナデは、笑っていた方が可愛いから。彼女から笑顔を奪う奴から、私は全てを奪ってやる。

そいつの命を、そいつのプライドを、そいつの魂を、そいつの希望を、そいつの望みを、そいつの過去を、そいつの未来を、奪って踏みつけて見せしめて潰してやる。

彼女を私から奪う奴も同様。カナデと私の繋がりを絶とうとする奴も、同じ様に全て奪って引き裂いてやる。

ああ結局私は、カナデを失いたくないだけか、カナデを手放したくないだけか。彼女にだけは自分の味方でいて欲しいだけか。

そんなくだらない、自分勝手なエゴを他人に押し付けるなんて、なんて凶々しくて醜いのだろう。

私は自分のことしか考えられない自己中だ。

彼女を想う気持ちだって、私は友達思いの善人なんてことはない。

その人と一緒にいたいという思いと、その人のことを思う気持ちは背中合わせだからだ。

裏と表程度の違いでしかない。

つまりは全て、自分の為。カナデを想う気持ちだって私のエゴ。

無償の愛みたいなの、綺麗な物じゃない。

そもそも、何の理由もなく、何の見返りもなく、人が人を好きになるなんてことは、絶対がない。

綺麗事を並べて誤魔化しているだけじゃないか。

世の中には星の数位の男女がいるけれど、そのどれも自分に得があるから、利害が一致するからこそ、相手に恋をして一緒に居たい、そう思うんじゃないか。

自分の中の性欲と、本能を満たす為により遺伝子の優れた人間を探しているのだ。

そうなのだ、この世界には無償の愛なんて綺麗事は存在しない。

あるのは純粋な利害だけ。全ては現実的だ。

だから私は悪くない。これは皆やっていること。

人間は、生きていく内に嫌でも誰かを恨んで、憎んでいる。

そうしなければ、誰かのせいになければ、罪悪感に襲われてしま
うから。

自分が傷つく位なら、他人を傷つけてやれ。

自分以外の誰か泣こうが喚こうが、傷つこうが、壊れようが、知っ
たことではない。

それが人間。人間の本来在るべき姿。

だから私は悪くない。だから私は許される。

そう、これは人間なら当たり前にすることなんだから、私がカナデを想う気持ちは、正当化され、誰にも邪魔できない。

それが××君、例え君でもだ。

嗚呼、堕ちていく自分が分かる。段々と濁っていく自分。汚れていく自分。

最悪だ。劣悪だ。こんなことでは彼女の友達でいる資格は……ない。

でも……カナデなら許してくれるよね。

カナデだけは私の味方だよね。

カナデだけは、……私を、信じてくれるよね。いつ迄も、どこ迄も。信じていて、くれるよね……。

19 / 救ってくださいお願いします

くっ……どっどっ……。

どっどっどっどっどっ……。

バシンバシンバシンッ。

バシンバシンバシンッ。

なんだこれは。どうなってしまったんだ私は。

身体が重い。剣が鈍い。腕が固い。足が棒のよう。

そして恐い。恐ろしい。嫌だ、もう戦いたくない。私の目の前のこの少年を傷つけるなんて、恐ろしくて、恐ろしくて。

そんなこと、……できない。嫌だ嫌だ嫌だ。

やめる。もう何も考えるな。集中、集中だ。いつもの私に戻れ。戻るんだ。

何を恐れることがある？ 今迄通りにやればいいだけのことじゃないか。

何をためらっているんだ私は。何を恐れているんだ私は。

バシンバシンバシンッ

バシンバシンバシンッ

苦しい。胸が締め付けられているようだ。闘いの最中で、こんなことは今迄になかった。

こんなに辛いなんて、闘うことが恐いなんて、こんなにも恐ろしいだなんて……。

そんな極限状態に追い込まれ、私は誰かの言葉を思い出す。

《俺はもう闘わないって。誰かを殴るのはもう飽きたんだよ。くだらない》

あああつつつ！ やめろつつつ！ 私はっ、私はっ……。

バシィンッ

そして私の竹刀は宙を舞った。私を守るものは、もうない。竹刀がなければ、もう終わりだった。

「部長。俺の勝ちです。やっと勝てました。長かった。……本当に長かった。やっと、あなたに勝つことがっ……」

目の前の少年は、微塵の容赦もなく私に向かって竹刀をふりおろす。

その面の奥に、残酷な笑みが見えた気がした。恐ろしい笑顔が……。

「……できるつつ！」

バシィンッ

勝負はついた。私は敗北した。私は負けた。負けた負けた負けた。

信じられなかった。信じることができなかった。

いつもは逆だった。竹刀を弾かれるのは彼の筈だった。

それなのに、それなのに……。

今無様に丸腰を晒しているのは私だった。

彼は、勝ち誇るように私を見下ろす。

「ありがとうございます。部長。これで次の大会、自信が付きました。部長のおかげですよ。淡野先輩」

「……そう。良かった、わね……。近江君、強くなったわね……」

嘘だった。彼はいつも通りだ。彼は変わらない。

変わったのは私だ。私はどうなってしまったんだ。

私は震えながら立ち尽くす。もう彼を見ていたくなかった。

彼が怖い。恐ろしい。不気味な笑顔。綺麗な顔をして、それでいて違和感だらけの表情。

その全てが、恐ろしい。

私は逃げ出した。更衣室へ走った。走って走って走って、走った。

その私を、他の部員達が見つめている。

どうしたどうしたと、指を差し合う皆。その全てが恐ろしい。

その全てに恐怖した。

私は扉に手をかける。ギイツと音をたてて開く扉。中に滑り込んで、そして崩れ落ちた。

今朝と全く同じに、全く違う理由で。

面を外し、胴を外し、小手を外し、軽くなった身体を抱えて。

ただ、ただ、泣いた。込み上げてくる涙は、ただ、ただ、溢れだす。

どうしていいか分からない。どうすればいいか分からない。

どうなってしまったのか分からない。どうしてなのか分からない。

苦しかった。とにかく苦しかった。

それでも涙は止まらずに、私の頬を通り過ぎていき、道着に落ちる。

染み着いた涙を拭い、涙が溢れだす目を擦った。

止まれっ、止まれっ、止まれっ！

私は部長だ。剣道部の主将だ。その私が、こんな姿を晒すわけには、
いかないっ。

しかし、その思いに相反するように止まらない涙。流れ続ける涙。

助けて……誰か助けて……私を救って、くださいお願いします、誰か……。

……そして、私はようやく思い出す。今朝起きたことを、事細かくに夢想する。

私は嫉妬していた。どうしようもなく嫉妬していた。

彼と仲良くする彼女達。二人が憎かった。どうしようもなく、憎かった。

そして私に向かってきた彼女に、咄嗟に反応してしまい、振りかざされた暴力。

私は安西奏に、ただ怒りをぶつけたただけだ。

彼女に嫉妬の炎を燃やし、彼女をその火で焼いてしまったかった。

彼女を壊し、彼女がいなくなれば、私のことを見て貰えると思った。

彼が、私だけを見てくれると思った。

……彼が好きだった。私は彼が好きだった。

今迄誰か異性にこんな感情を抱いた事はなかった。

男性という存在は、私の中では常に闘うべき相手でしかなかったし、お父さん以外には数える程にしか負けたことがない。

ましてや同年代の男の子に、心を奪われたことなどない。

私には男も女もない。全ては倒すべき相手、だった。

それが……あろうことが、好きだなんて、そんな自分が恥ずかしかつた。

そのような幼稚な感情を抱いている自分が情けなくて……それでもそんな自分を否定しきれない、相反する感情が、私の 中でぶつかり合い、そしてただ苦しいだけだった。

好きって、こんなに苦しいことだったなんて……。

こんなに胸が痛いなんて……。

憎しみと隣り合わせの感情だなんて……。

それなら、それなら……好きになんてなりたくなかった。あいつのことなんか知らなければ良かった。

同じクラスになって、同じ授業を受けて……そしてあいつの人形みたいな表情をみたとき、無性に嫌だった。

まるで、この世に自分独りしかいないかのような、諦めたような冷たい顔をしたあいつに、私は竹刀を向けた。

これ迄も、よく分からないものには取り敢えず竹刀をふりおろせば良かった。

それでなんとなくあったからだ。私はそうやって生きてきた。

でも違った。彼に痛みを与えたとき、私にも痛みが走った。

私は驚いた。そんな経験は生まれて初めてだった。

痛みは与える物であって。共有する物ではなかった筈なのに。

私はその場では平静を保つことができた。

そんな感覚は気のせいだ、と思い込むことで私は私を保つことができた。

更に私は、記憶のページをめくる。

彼が練習中に体育館にやってきた。そこにいる彼が、あまりにも不自然で、最初はその事事態を疑った。

でも……それは現実だった。そして、私は嬉しかった。

何を思ったのか、そんな暖かい思いが心の中を埋め尽くしていった。

馬鹿な。私は、彼に会いたかったとでもいうのか？

彼の顔を見たかったとでもいうのか？

そして私は感じた。

彼の殺気、というか戦闘者としての気配を感じた。

一瞬で理解した。彼は私と同じなのだ。

そして私は思った。彼のことをもっと知りたいと。彼をもっと知ってみたいと。

そして……気が付いたら、好きになっていた。

どうしようもなく惹かれていたのだ。

教室で隣の机に座ると、彼の顔をつい見てしまう。

そのことを絶対に彼に悟られないように、細心の注意を払って。

彼が別の方向を向いていると確認に確認を重ねて、そして初めて彼の顔を見る。

そして見つめ過ぎて、気付かれそうになったときもあった。

そして今朝、例えば二人きりで話したのはそれが最初。

私は、彼の顔をまともに見れなかった。

どうしても、目を背けてしまう。だって、だって……恥ずかしいから。

多分彼にも分かっているのではないか……？

私が彼を避けているように、彼の目に映ったかもしれない。

そう思うと、また胸の奥が痛かった。

ズキンズキンと、捻れるように痛むのだった。

そして、彼があんなことをきいてきたのには、私は動揺を隠せない。私は期待してしまった。もしかしたら、××も、私と同じ気持ちでいてくれているのかも、と。

そんなありもしない妄想を膨らませて。

私は愚かだった。どうしようもない愚か者だった。

なぜなら、彼女の姿を見つけた彼の顔を、見てしまったから……。

あの照れ隠しのようなツンとした平静を装つかのような、でも本当は嬉しそうにしていたのが私には分かった。

だってそれは、私が彼に向かって被った仮面に、よく似ていたから……。

だから私は確信した。彼の心には彼女しかいないのだと。

そんな知らなくていい真実は、私の心には、重すぎた。

《良かったな。勝手にやってな》

彼の言葉が蘇る。

《俺達はお前とは違うんだ。》

突き放しているように見えて、実はそうではない照れ隠しのような。

《朝からお前の滅茶苦茶に付き合ってられないんだ。一人で暴走してろ》

嗚呼酷い。彼の、彼女に向けられた言葉ばかりが蘇る。

悲しみは続く。そして終わらない。

私はどうすれば良いのだろう。

誰か、私を救ってください。お願いします。

助けて、ください。お願いします……。

20 / 嘘をつきました……それも嘘でした

沈黙。誰もいない静まり返った体育館。

剣道部の活動が終了し、時間が止まっているかのように普段の喧騒を失っている空間。

普通ならそこには人の声があってはならない、人の気配があってはならない。

そんな沈黙の中に、私はいた。佇むように、立っていた。

無意味にはない。ちゃんとした、意味があってここにいる。

理由があってここにいる。全てを終わらせる為だ。

終わらせる為に、私は来た。もうすぐここへやって来る、悪党に思い知らせてやる為だ。

あいつの悪意を、敵意を、真っ向から打ち破る為だ。

早く来い。さっさと来い。私はもう、待ちくたびれている。

痺れを切らせている。待った。長い時間を待った。

来る日も来る日も待った。この日が来るのを、ずっと、ずっと待っていた。

ギイツ……

重い扉が、開く音がした。そして私の目に映る、一人の男子生徒の姿。

平均より高い身長。恵まれた体格。それでいて引き締まった身体。

きつと、女の子ならだれでも擦れ違えば振り返らずにはいられない、整った顔。セツトされた髪の毛。

そして違和感だらけの表情は、私が前に見たときと変わらない。

心の中で何を考えているのか、分からないのが恐怖を掻き立てる、そんな不気味な印象を受ける一人の人間と、私は相對していた。

「安西先輩。久し振りですね。なんだ、あの手紙、先輩だったんですか？ 何の用ですか。何の用があつて、こんなところで二人きりで？」

彼は何の後ろめたさもなく、自然に私に話し掛けてきた。

「それは君が一番分かつてるんじゃないの？ 私にそれを言わせる気？ だとしたら、やっぱり君は駄目だね。あのとき振つといて正解だった。私は君が嫌いだもん。」

「ねえ？ ……近江君？」

オウミシユンが、私の目の前にいた。近江瞬が、そこにいた。

「酷いですね。俺は何も悪いことしてないっていうのに、嫌いだなんて、傷つきますね……」

「うるさいだまれ……」

「……………」

「私はやっぱり君が嫌いだよ。うん君が嫌いだ。だって、君は、……」

私はもう人を嫌いにならないと決めていたのに、……君だけは、君だけは……。

「君は醜い……からね」

「……へえ、そうすか、俺が、醜い、ですか……。ふうん、そういう見方もあるか。なんてったって世界は広いっすからね。そういう考え方もあるでしょう。この世界のどこかに、先輩が仲良くなれない人間が数えきれない程にいるのと同じで、そういう物の見方もあるでしょう。……そうですね。そうです」

彼は、そんなことを言った。まるで自分の非を認める気など毛程もないというような、そんな口調。

そんな目をしていた。嫌なことは全て、他人のせいに行ける、そんな目を、していた。

「……私に嫌がらせをするのはどうして？ 君、私に振られたのがそんなにショックだったの？ そんなに私のことが好きだった？ だとしたらおあいにく様。君全然タイプじゃなかったから。ごめんね」

彼は平然と、ただそこに立っているだけだった。私を見つめているだけだった。

「ごめんね。ごめんね。ごめんね。だから二度と近寄らないでね。不幸の手紙とかマジ古いし、ストーカーとかマジキモいし、盗撮とかされたって、それがなに？ それそんなに楽しい？ だとしたらやっぱりあんた狂ってるよ。誰かの不幸しか笑えないなんて、やっぱりあんた……」

思いつきり、体重を乗せた、平手打ちをくらわせた。パアンと小気味良い音が鳴る。

「私は嫌いだっつ」

「……………」

「大嫌いだっつ」

体制を崩す彼にもう一度平手打ち。パアンという音が体育館に響く。これで終わりなのだろうか。これで全てはおしまい、なのだろうか。

ここ迄やれば、さすがの彼でももう手出しは出来ない筈。

嫌がらせは止まる筈。アズみんにもバレってしまったけど、もう隠す心配はなくなる筈。

これでなにかも、悪い夢は去った。全ては終わり、夢は覚める。

悪夢はいつか、終わるのだ。だから、これで……もう……終わり……。

心の底から、感動が込み上げてきて、そして私の顔に笑みとして表れる。

あはははは。あはははは。あはははは。ねえ、神様ちゃんと見てた？ 私、ちゃんと、……できた……

一瞬。私からの暴力を受けて呆然としていた彼が、全身の力を抜いたかのように、私にしなだれ掛かって、きた。

自然に、ごく自然に、起きたそれに私は反応できない。

彼の体重を感じ、そして……

彼がその綺麗な顔を不気味な程に劣悪な笑顔で歪めていることに気が付き、どうしてだろう？ どうしてそんな顔を、して……ざく、ざくざくざくズブズブズブ

「……っ？」

あああっっっ。嗚呼嗚呼嗚呼っ。自らの腹部に走る絶望的な苦痛。

一瞬で全身を恐怖に苛まれ、支配され、私は無我夢中で、必死で後ろ向きに倒れこむ。

私は畳の上に倒れ、自分の身体から血の気がひいていくのを感じた。力が抜けていく感覚。確かな痛み。確かな痛み。もう指一本さえ動かすことは叶わず、そしてそんなどうでもいいことがどうでもよくなる位に、私の周囲にたまっていく赤い水溜まり。

私を見下ろす彼の手元にキラリと怪しく光る鉛色の物体を見ることができた。

……包丁……だった。

一体身体のどこからそんな物を出したのか。そんな疑問が沸いてきて、そして目の前に、彼の顔があった。

彼は私の身体の上にあった。私は動けない。苦痛に呑み込まれていくように、私は動けない。

彼は私の耳に口を添えて言った。

「……先輩。綺麗です……。前から赤が、似合うと思ってました。やっぱりそうだ。間違ってたかった。先輩には赤がよく似合う。……とても魅力的です。とても綺麗ですよ。この世で一番、あなたが綺麗だ」

私の身体を抱き締めて、そして全身を壊す位に激しく包容し、包容され、そしてまた言う。

「可愛いですよ。先輩。安西先輩。とてもとても、可愛いですよ。今にも枯れてしまいそうなその顔も、赤く染まったその服も、人形みたいに動けない身体も、全部、全部可愛いです先輩」

彼の制服のブレザーに、私の血液が付着する。彼は血塗れになるのも構わず私を抱き締めて繰り返す。

「やっぱり好きです。先輩。俺、今迄色んな女と関係してきましたけど……先輩が一番です。先輩が一番好きです。だから、だから、」

あんな奴のいないところへ、先輩を送ります。後で俺も行きますから、向こうで待っていてください。一人にはさせません、よ。先輩」
彼がいう《あんな奴》とは一体誰のことだろうか？ そんな疑問は、浮かぶ前に消える。

今の私には、そんな思考を働かせることさえ困難だった。

意識が朦朧とし、意識が混濁し、意識が耗弱し、途絶えそうだ。今にも消えてしまいそう。

私は、死ぬのだろうか。……………嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ。いやだいやだいやだ。イヤダイヤダイヤダ。

私は死にたくない。生きたい。生きたい生きたい生きたい生きたい。

嗚呼嗚呼嗚呼。こんなにも酷い。こんなにも絶望的だ。こんなにも救いようがない。

彼に言った言葉なんか嘘だった。世界は、やっぱりきりがなくて終わりがなくて救いもなかった。

不幸は不幸で、不幸でしかない。不幸は、誰がなんと言おうが、自分がなんと思おうが、不幸だ。

ごめんね××君。私嘘ついたよ……。騙してごめんね。不幸は不幸でした。

彼がぶつぶつぶつぶつ小声で何か言っているが、もう何も聞こえない。何も感じない。

私はここで終わる。ここで終了だ。ここで終末だ。

あゝあ。うまくやったつもりだったんだけどなあ。

うまく人気者になれた、つもりだったんだけどなあ。

そんなにうまくいかないか。そんなに簡単にいかないか。

人生は甘くないし、世界は甘くない。

ていうかそんなの関係ないし、……人生とか、世界とかいうまえに私は一人の人間に殺されかかっているんだから。

一人の人間に、生命を剥奪されようと、しているのだから。

人生も世界もないか。あはは、あはは笑えるよ。

笑えて、笑えて、……そして泣けてきた。

泣けて、泣けて、そして笑えてきた。

メビウスの輪みたいに裏と表が繋がっていて、笑っているのに泣いていた。

誰かが助けてくれれば、いいのに。

誰かが助けてくれれば、いいのに。

今迄に仲良くなった皆の中の一人でもいい、一人でもいいから助け
てくれれば、いいのに。

……分かってる。現実はそのなに甘くない。世界と同じで、人生と
同じで甘くない。

そんなことは、分かって……

「……安西ここに入ったのか？ もうここしかないよな。ここしか
……でも変だよな。なんで剣道部の活動場所なんか用があるんだ
？ 誰もいないぞきつと。淡野だって、きつともう帰ってる」

壁一枚隔てた、向こう側から聞きなれた声がある。

「うん。おかしいね。ここだと思っただけ。カナデがこっちの
方に行くの、見えただけだな」

「本当か？ 神田？」

「あゝ信じてないでしょ？ 本当の本当に、見たんだったらあ」

もう一人。もう一人聞きなれた声。

私は笑いたくなくて、そしてやっぱり泣いた。

救いはやっぱり、あるのかもしれない……

21 / 狂って狂って狂って……

「そう言えば、安西どこにいったんだ？　もしかして先に帰った？」

「あ、さっき見かけたけど……鞆まだあるし戻ってくるんじゃない？」

放課後。人の少ない教室。

特筆する程のこともない会話に気を取られ、一人の人間の消失を気づけなかった。

それにしてもどこへ行ったのか。俺達に何の断りもなく姿を消すなんて、あまりないことだ。

「どうするカナデ来る迄待つ？　置いてっちゃうのは可哀相だし、それとも探しに行こっか？　私心当たりあるから」

「心当たりって、なんだよ？」

「まあいいからいいから」

そう言っつて本来淡野の席である俺の左隣の席から立ち上がる神田。

鞆を手に可愛らしく微笑み、軽く前髪を整えると俺にも立つように促す。

まあいいか。時間はいくらでもあるのだ。自由ばかりが幸せとはいわないが、墮落が好きな自分は、この先も何を成し遂げることはな

いのだらうなと思う。

そんな自分が嫌になるが、それを考えないようにして自分はいきている。

そうしていればいつか自分にも何かを変えられるのではないか、そんな風に思考をすり替えながら生きている。

自分を騙しながら、生きている。

「いっいっ」

そうして二人で教室を後にした。彼女の言う心当たりという場所を指す。

「そう言えば大丈夫かなあいつ……」

「あいつって？」

「ほら淡野、だよ。今朝色々あっただろ。色々さ……」

本当に色々なことがあった。彼女が崩れ落ちて色々な感情を吐き出すのを、俺はその場で見ていた。

……でも俺の中では変わった一つの思いがあった。いつもとは全然違う身に付けた見えない鎧を全部外したみたいだ、そんな魅力を感じた。

あいつあんな顔するんだ。あんな強いくせしてあんな表情ができるなんてずるい。

本当に美人は得だよなあ、と思ったり思わなかったり。

「でも××君ちゃんと言えたじゃん、友達だからって格好良いこと言ってた気がするよ」

「まあ、そうなんだけど、あれで良かったのか……あれで合っていたのかって思わないでもない、んだよ」

自分に誰かを救い出せるような力があるとは思えない。そんな高尚な、聖人のようなことがなせるとはどうしても思えないのだ。

だから今でも疑っている、だから俺はただ安西の真似をして調子に乗っているだけの愚か者なのではないかと。

彼女に憧れるあまり、彼女が眩しすぎるあまり自分にもそれが出来たらどんなにいいかと。

そしてそれを淡野で試しただけなのかもしれない。だとしたら最低だな。俺。

お前に淡野の気持ちを弄んでいい理由等ないだろうが。奇麗事を並べて上等な人間にでもなつたつもりかくならない。

俺はまた一つ自分を嫌いになってみた。

「ふうん、難しいんだね」

「ああ難しいんだ」

そっかそっかと、歩を進める彼女。気がつけばいつか来た体育館が見えてきた。

「もう部活終わってるよな、剣道部」

「うん、もうこんな時間だしね」

長話が過ぎたらしい、何時までも帰ってこない彼女も彼女だが。

そして扉の前にたどり着く。この辺りの周辺は二人で見回った。つまりこの中に彼女がいるのか？ こんな時間にどうして何も告げずにそんなことを……。

「……安西ここに入ったのか？ もうここしかないよな。ここしか……でも変だよな。なんで剣道部の活動場所なんか用があるんだ？ 誰もいないぞきつと。淡野だって、きつともう帰ってる」

「うん。おかしいね。ここだと思っただけど。カナデがこっちの方に行くの、見えたんだけどな」

「本当か？ 神田？」

「あゝ信じてないでしょ？ 本当の本当に、見たんだってばあ」

彼女が嘘をつく理由もないだろうが、それにしてもおかしい。理由は上手く言えないが、この何とも言えない息苦しさはなんだ。

一体俺は何を恐れているんだ。馬鹿馬鹿しい。

「とりあえず鍵開いてるか確かめるか」

俺は鉄の扉に手をかける。もともと重いそれだが、どうやら鍵はかかっていない様子。まさかとは思ったが……本当に誰かいるのか。扉をゆっくりと、ゆっくりと開けると……………

そこには、目の前には、眼前には、

「なにこの鉄みたいな臭い。……あれ鉄っていうかこれは……つつつつ????????」

神田はそこに何が倒れているのかよく見ないままにまずその異臭に気がついたのだろう。それはそうだ。

今この閉ざされた空間は鼻をおおいたくなるような異臭に満ちている。

確かにそれは、そうなのだが……

俺はそんなことが頭の中から吹き飛ぶ程の戦慄と恐怖とそれから何より無理解に襲われていた。

そこで起きている何かが何なのか理解不能。意味不明。掌握することができないのだ。

それはどう形容すればいいのか表現しづらい行為の現在進行形だった。

こんな状況じゃなければ「失礼しましたっ」とでも言って回れ右すべきかもしれない。

そんな見ようによつては色っぽい状態かもしれない……それが、二人ともチマミレの身体をしていナカッタラ……。」「つつつつつつ……」

チマミレの身体をしていナカッタラ……。

制服を着た男女が二人赤くなって倒れていた。

勿論赤くなって、と言つのは前向きな意味ではなく後ろ向きでの意味でだ。

途方もなくネガティブで、絶望的に後ろ向きな意味でだ。

出血多量の間人が二人倒れてんだよつつつつ……！！！！

神田が口を両手で抑えて今にも嘔吐しそうな顔で絶叫を解放するのを横目に、俺は走っていた。

それはもう全力でだ。全力疾走。

倒れている女子生徒の方の顔に、とてつもなく嫌な心当たりがあったからだ。

そして嫌な予感はずれない。世界は、現実には本当に意地悪だ。

くそつつくそつつくそつつ……くそつつくそつつくそつつ……。何で、何なんだよ。どうしてそんな……こんなことが。

「安、西……」

倒れているのは安西奏だった。信じたくなくても現実には嫌な位に現実そのもので……そしてすべからず残酷で最悪だ。

最悪で最低で、救いなく、終わらない絶望。どこまでも堕ちていく、気が、した……。

安西に覆い被さるように男子生徒が倒れている。その制服にも塗りとくったように血の跡が……いやこいつの血じゃない。

これは安西の血液が付着しているだけで……まさか……

絡み合うように倒れている二人の身体に触れようとしたそのとき、ゾクツと冷ややかな戦慄が走る。

直感だけで自らの身体を無理矢理回転させてその刃からギリギリで避けた。

怪しく光る鉛色の突起物。瞬間に振るわれるそれ。振り下ろされる狂気。

はあっ……はあっ……包丁っっ！！

倒れて動かないと勘違いしていたが、この男はまだ動いている。それどころか……俺に向かって凶器を振るってきた。

何なんだ、何だこいつ？ 誰だよこいつ一体なんだっっ！

安西を赤く染め上げたのはこいつに間違いない。その赤黒く染まった鉛色の物体が何よりの証拠。

それを今、この俺に向けて斬りつけてきたのだ。知らない奴だ。誰だこいつは。

「……あゝお前知ってるぞ」

俺は知らないっ。目の前のそいつはまるで懐かしの旧友にでも会ったかのような気軽さで俺を見る。繰り返すが、俺は知らないこんな奴

「お、お前何してんだよっ。俺はお前なんか知らないっ！」

ゆらり、ゆらりと不気味な笑みを浮かべた。

「お前は先輩に付きまとう、《悪》だ」

「は？ お前何言ってる？ 意味が分からない……お前何なんだよそこどけっ」

俺と倒れて動かない安西との間に狂気を片手に立ちふさがる男。とても正気とは思えない。通常の間をとおくに踏み外した人間だっこいつ。

狂ってやがる。その狂った狂気が今俺の前に立ちふさがる。

「先輩待っててください。こいつをまずぶっ殺してから、俺もそっち行きますから……大丈夫です安心してください。俺達が行くのは天国で、こいつは地獄ですから……もう邪魔できませんよ」

そういつて男はその手の凶器を俺の顔に向けた。明らかに戦闘体制。目の前の敵を倒す構えだ。

俺はこいつにとって殺すべき、消し去るべき存在。このままではやられる……

男の包丁が鈍く光る。嗚呼っつ凶器っつ。包丁……あれを受けたら俺は、どうなる？

男の制服を濡らす血液をまた見てしまった。くそっつ血だっつ安西の血だ……俺もあんな風に、肉体を貫かれ……赤い血が、ああ……嗚呼嗚呼嗚呼嫌だっつ。怖い怖い痛い痛い。

そして血だ。包丁だ、殺される。死だ。そこまで、すぐそこまで死がきている。

もうすぐ俺を死が殺す。嫌だっつ死にたくないっつ。死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくないっつ！！

男は無表情になりその目を鋭く俺に向けた。その視線だけでもう死から逃れられないような気になる……怖い怖い怖い。嫌だ死にたくない。

人形のように動かない安西が目飛び込んできた。血だ。チマミレだ。

みるみるうちに彼女の生気が消えていくような気がした。一分一秒が彼女をじわじわと殺す。それは明らかだった。早く彼女を安全にしなければ待っているのは死だ……

彼女が死ぬのは嫌だ嫌だ嫌だ死なせない。でもでも、それ以上に恐ろしいっつ刃っつこの存在そのものが人を殺したがっているような

悪党が、きつと俺を簡単に殺す悪党に立ち向かうなんて無理だ無理だ。

「さあ殺す。今すぐ殺す。これでお前を簡単に死なす。死なす死なす死なす」

死ぬのは嫌だ。死にたくないっつ。痛いのは嫌だそんなのは耐えられない。

…扉は開いている。走れば逃げられる。逃げれば、助かる。命は助かる。

俺は死なないことができる。そうすることができる。でも、でも……

死に真つ逆様に向かっていく彼女の顔が浮かぶ。死に顔が浮かぶ。

安西奏を、俺は見捨てるのか。見捨てて自分だけ……自分だけ助かるのか。

そうすれば痛くない。そうすれば苦しまないで済むぞ。良かったじゃないか。助かったじゃないか。

さあ早く走れ。神田は放心状態。正常な判断と行動ができなていない。

きつと俺が逃げれば彼女も殺される。

この男はきつと殺るだろう。俺を殺すのも神田を殺すのもきつとこいつには変わらない。

同じ、ただ一人の人間が死ぬだけ。それだけの違いでこの男は殺人をやめない。きっと殺す。

それもいい。彼女を見捨てて俺が生き残る。そうしなければ俺が死ぬ。それだけは駄目だ駄目だ。

死ぬのは痛い苦しい怖い。そんなものは他人に与えておけ。他人の痛みは自分には届かないのだから。

「……助、けて……」

頭の中を電気が走ったように走り抜ける衝撃。ショックによりようやく動き始める思考回路。

死にかけている、それでも生きている。今確かに彼女の声が聞こえた。

彼女が俺に助けを求めている。おい俺は何を考えていたんだ。馬鹿馬鹿しい、全く馬鹿馬鹿しい。彼女を見捨てるだ。そんな位ならその腐った頭の中身を全部捨ててしまえ。さっさと目を覚ますんだよっこの馬鹿が。

自分で自分の頭を殴った。心地良い痺れ。心地良いショック。衝撃が壊れかけた思考を冷静にしてくれた。もう大丈夫だ。俺は目覚めた。

目の前、男。背が高い。筋肉質。右手に包丁。慣れた手つき。それがどうした。俺を誰だと思ってる？

思考を研ぎ澄ましていく。少しずつ、少しずつ戦闘体制に持ってい

く。

ゆっくりと、ゆっくりと死の戦慄にも馴れてきた。死ぬのは負ければの話しだ俺は負けない。こいつを負かす。

両手を構えた。誰にも負けなかった頃感覚が徐々に戻ってくる。ブランクを埋めていく戦いの興奮。いい具合にそれが俺から恐怖を消し去った。今ならやれる。

包丁を持つ手が少しずつ俺の身体に近づいてくる。常に包丁の先端を俺の顔に向けているのは効果的だった。

まず凶器は人間に恐怖を与える。それが凶器のもつ本来の殺傷能力を遥かに上回るのだ。

それが凶器の持つ最大の利点と断言していい。凶器の恐怖に捕らわれ、怯んでしまうのが一番不味い。ならばどうすべきか。

昔道場の師範が言っていた。そのこと自体は恐らく冗談半分で面白可笑しく語っていたのだとは思う。

凶器を持つ相手なら、それが相手の身体の一部だと思って闘うのが効果的だろう、と。

ならば相手が包丁を持つのならそれが相手の拳の延長線だと考えればいい。

恐ろしく切れ味のいいパンチを繰り出してくる相手だと自分を騙せばいいわけだ。

よしやるう。相手は素手だ。素手のしかも自分と同年代の相手になど俺は負けたことはない。

受ければ身を斬られるパンチなど喰らわなければ全く問題ない。今迄俺は何を迷っていたんだ。こんな奴さっさと倒して安西を助けなければ。

仕掛けてきた。俺に向かって突進。その右手の包丁が突き出された。こんな鉄の塊、恐れるに足らない。ただの尖った金属だ。

その攻撃を簡単に避け、男の顔面に渾身の拳を叩き込む。

それは相手の動きを止める為だ。顔を狙われれば誰でも動きが鈍る。さつき迄のお前の戦法を真似させて貰ったわけだ。悪いな。

思った通り、両目をつぶり苦痛に悶える男。空いている左手で顔を押さえた。おいおいそんなこと、してていいのか……。

その隙を、最大限に利用し右拳を思いっきり強く握る。パワーを限界まで溜め、そしてそれを男の腹部に叩き込んだ。

肉体を貫く感覚が痺れる。物体を貫く感覚が快感。男の身体が一瞬宙に浮いた。

そのままバランスを保てなくなり、男は転倒。右手の凶器を取り落とす。それは神田の方に飛んでいった。

……は……ああっ……倒せた。なんとかやれた。全力の一打はそれだけで男の動きを奪っていた。苦しそうにまだ呻いていた。その顔にさつき迄の余裕は無かった。

近づいていって顔面に一発。それだけでもう男は気絶した。本当に誰なんだこいつ。今はそれより……

「神田、大丈夫か？」

扉に身体を預けてただ震えるばかりの彼女に声をかけ、平静を促す。

「……」

するとゆっくりこちらに歩いてきた。顔を下に向けながら、歩いてくる彼女。

「助けを早く呼ばないと……」

安西の身体は既に全く動いていなかった。今は一分一秒を争う。彼女を助けなければ……

俺は誰かいないかと出口に向かって走った。そのとき……そのときに、俯きながら笑っている神田の顔が見えた気がした。

え……?? なんてどうして笑っている、んだ……

背筋を這い上がってくる冷たい何か。神田の表情があまりにも不気味で、不可解で……立ち止まって彼女の方を振り返る。

「神田……どうし、た……」

時間がゆっくりに、なった気がした。目の前の光景が、スローモーションになったような、そんな錯覚。

見れば神田は男の身体の横にかがみこんでいた。何で、どうしてそんなことをしているんだろう。

その手に握られた鉛色の物体を見つけて血の気が引いた。神田の右手にさっきの包丁がつっ!!

機械のように、冷酷に振り下ろされる狂気。その向かう先は倒れた男の首、彼女が何をしようとしているのかようやく理解し、叫ぶ。

「止めろっつ!!」

駄目だ間に合わない。何の躊躇いもなく男の急所を狙って包丁を振り下ろすのが見えた。……神田っつ!!

ビュンツそんな空気を切り裂くような、何かが俺の横を通り過ぎた気がした。

細長い何かが射出され、そして後ろから弱き強者の声が出た。

その叫び声は今の俺にはとてつもなく頼もしく感じられた。

もう大丈夫な気がした……

22 / 絶対強者は狂わない

「はあっつっ!!」

そんな力強い叫びが体育館に響き、そしてキーンと金属が弾き飛ぶ音がした。

後ろから飛んできた竹刀が神田の右手の包丁を正確に狙ったのだ。そんなことができるような奴を、俺は数える程しか知らない。

それに……今の声でもう分かるだろ。あいつだよあいつ。

包丁がカランカランと音をたてて転がる。神田は予想もしない攻撃を受けた右手を押さえて戸惑うばかり。

そして出口に立つ一人の少女を見て呆然とする。自分が何をしようとしていたのか分かっていないような顔で、ただ彼女を見つめる。

「うちの期待の新人に、手を出すのは許さないわ。それがだれでも、例えあなたでも神田さん……」

その目を赤く腫らして、淡野観月がそこにいた。その姿は堂々として勇ましい。

本当に、格好良いよなこいつ。

「あ、あたし……何を、して……」

途端に冷静さを失う神田。頭を抱えてその場にうずくまる彼女。自

分が何をしようとしていたのかようやく気づいたのだろう。

その顔はもう見れたものではなかった。

そんな中、充満する異臭を物ともせず、広がる醜悪に怯みもせず、全てを見下ろし全てを理解し、……それでも彼女は取り乱すことなく強く立っていた。

「……淡野」

淡野観月はそこにいた。絶対強者は狂わない。どんな最悪にも呑み込まれず、どんな醜悪にも狂わない。なぜ、どうしてそんなに冷静でいられるんだ……

「淡野つつ安西がつつ……」

「分かってるわ」

「分かってるならさっさと目を覚ませつつ……人が一人死にかかってんだぞつつ!!」

「分かってるわ……」

「分かってるならさっさと目を覚ませつつ……」

「目を覚ますのはあんたの方よつつ!!」

「……?」

彼女は悲痛な顔をして俺に訴えかける。

「……私血とか、そういうのは平気なの。そんなの見飽きたから……。いちいち驚いてたらきりが無いんだから。私はほら、そういう家だし……」

そうか剣道道場。その家に生まれた彼女。こういう荒事は馴れたものか。

「何してるの……」

「何って……」

「早く救急車っつ！！ 見たところ彼女の出血は急所を外れてるっつ。助かるっつ。だからさっさと目を覚ませっつ x x っつ！！」

彼女の怒号にようやく我を取り戻し、携帯電話で救急車を呼ぶ。

その間淡野は神田を優しく抱きしめて慰めていた。「大丈夫、大丈夫だから……」と、そんな顔もできるんだな。やつぱりずるい。

電話をかけ終わり、俺は助けを呼ぶ為に体育館を後にする。ひたすら走り、歩いていた男性教師を見つけて事情を大まかに説明。

すぐにその異常さを理解してくれたらしく、俺を追い越して体育館へ向かってくれた。

救急車はすぐにきた。救急の人間がやってきて、安西を担架に乗せて運んでいく。

まだ淡野は神田の身体を抱きしめていた。まるで母親のように……「大丈夫、大丈夫」とやっている。

なんだ、お前にもできるじゃないか。誰かを救えるじゃないか。

ついさっきは救われる側だったくせに、お前にもできるじゃないか。

彼女はもう大丈夫だな。

こんな俺が言える事ではないけれど、それでもなにか、暖かいなにかが俺の心を満たしていた。

……それにしてもこいつは何だったんだ。俺の疑問はそれに尽きる。

あれから沢山の教師でこつた返し、そして警察もやってきた。

あとは全て任せればいいか。今は彼女達のそばにいてやろうか。自分に何ができるとは思わないが、それでも、何かできると信じて……

こんな俺でも、彼女の力になれるだろうか……

できる限り、やってみることにする。

23 / 奏テ終ワツテ

近江シユン。それがあの男の名前だ。

あの後冷静になった神田から事情をきくことができた。安西は、近江シユンに嫌がらせを受けていたらしい。

理由は告白を断られたから、もともと精神の不安定な人間だったらしい。後から色々な話をきいて知ったことだ。

奴は警察に逮捕された。手錠をかけられ、パトカーで連れていかれた。

奴に同情する気等ないが、後から分かったことなのだけど……奴の家は父親の虐待が酷かったらしい。

母親を殴りつけ、子供を殴りつけ、それが当たり前の日常はどんなものか……と想像した。

もう両親と会うこともないだろう俺とどちらがましか、と考えてしまっ。

多分どちらがより最悪かなんて決めつけることが間違っているのだ。

俺にとっての最悪があるように、あいつにも違う形の苦しみや痛みや悩みがあったのだ。

それだけは、分かっている……

奴の気持ちが分かってしまう俺は奴と同類なのかもな。そんな考えたくない想像を振り払い、目の前で可愛らしく笑う彼女を見た。

「ねえねえ〜聞いてる〜？　ねえってば〜」

「ん？　ああ悪い。よくきいてなかった」

安西は助かった。傷は急所をそれ、致命傷には至らなかったのが原因という一歩間違えば……という嫌な想像が脳裏をよぎる。

「退院したらみんなで遊びにいこ〜って……言っていたとこだよ〜。ねアズミン？」

「う、うんそうだねカナデ……」

ここは病院の一室。入院病棟。安西が運ばれた病院だ。彼女は今入院している。

致命傷ではなかったとはいえ、充分に当分の療養が必要な位には、傷を負ったのだ。

ましてや女の子。身体に受ける負担は計り知れない。

「ああ。いくらでも遊びに行けばいい。でもそれは怪我を治してからだ。無理してまた何かあったら困る……」

「あ〜心配してくれてるんだ〜。嬉しいよ〜。可愛いなあ〜」

そんな屈託のない笑顔に目が眩む。くそやばい可愛い。

「……うるさい」

「あゝ照れてる〜？」

「はっ？ ばかそんなんじゃねえよ……何でお前に照れんだよ意味分かんねー」あははツンデレだゝ。なんて言っていた。きこえないきこえない。誰がツンデレだ誰がっつ。

「……」

病室の隅に淡野の姿があった。制服姿。ブレザーにプリーツスカート。

ベッドの脇に椅子を置いて座っている神田も同じだ。学校帰りに俺達は安西の病院によっていこうという話しになったのだ。

勿論淡野も誘って、そういう話しを神田としたのだ。

事件は新聞に載った。そんなに大きな記事ではないが、そんなものだろう。誰かが死んだわけでもない。

そんな事件の注目度なんてたかがしれている。一人の高校生が、同じ高校生を刃物で刺した、でも一命を取り留めました良かったですね。そんなことが書かれていた。下手に大きな話しになっても困る面倒なだけだ。

「ミズキ〜会いたかったよ〜寂しかったよグスン」

「私は別に……」

「え〜ヒドいよ。ミズキは私のことキライ、かな？」

「……嫌いじゃないけど」

「わーい。ミズキが私のこと好きだって〜ねえアズミン」

「良かったね」

「ち、ちよつと好きなんて言っただけだ」

「え〜じゃあ他に好きな人とかいるのかな？」

「……っつっ??」

急に取り乱す彼女。あのときあんなにも冷静だった彼女がこんなことで赤くなっているのはなんか可愛かった。

赤くなって、というのは勿論前向きな意味でだ。

途方もなくポジティブで人間味のある、前向きな意味でだ。ほのかに朱がさした彼女は眼鏡を少し直して「もうバカ」なんて言っていた。

「淡野顔赤い。凶星かよ」

少しからかいたくなった。するとその顔を更に動揺させてあたふたする。なんか面白い。

「ち、違っつっ好きじゃないからっっ！」

？ 何が違うのだろう。誰を好きではないのだろう。まあいいか。
事件の話は今はあまりしない。そういう雰囲気になると気まずくなる
ことがわかっていいるから皆それを避けているのだろう。

でも、今回の件で色んな物を得たし失ったと思う。あまりにも突然
に想像も出来ないことが起こりすぎて、皆自分を偽る暇が無かった
のだ。

それぞれの想いが交錯し、それぞれの気持ち为重なり合い、俺達は
今ではどんな隠し事もしない強い絆を得た。

かけがえのない大切な繋がり。ほらあそこでもやっている。

神田が淡野の手を握っていた。あれから気持ち悪い位仲がいいのだ。
女同士だということを考えてもやはり行き過ぎじゃないかと……

それぐらい心配する程にああやって寄り添いあっている。

別に仲が良いのはそれはそれでいいのだが……まあよしとしよう。
仲が悪いよりはいいだろうから。

学校ではちよつとした有名人だ。俺達が事件に関わっていたという
事実はあるという間に伝わってしまい、今でもたまに質問責めにあ
う。

特に俺達のクラスに事件の関係者が四人いるということ、その内
に一人がまだ入院しているのだが、盛り上がる理由にいつでも食
いついてくる奴らには格好の餌食だ。

暫くは大変だった。普段は誰とも口をきかない俺さえも記者会見のような質問攻撃にあったのだ。

安西が退院したときのことを考えたくはなかった。

…まあ平和的な悩みだとは思う。ついこの前自分が命の危機に晒されていたなんてことはもうよく思い出せない。

そういうことは忘れられるのが一番だ。……神田も自分がしようとすることはさっさと忘れるのがいい。

人間なら誰でも過ちを犯すことはある。俺だってそうだ。重ねて言うが俺に誰かの間違いを正すなんて綺麗なことはできない。

出来てもそれはきつと誰かの真似事だ。外側だけなぞっただけにすぎない。

……それでもふと思う。こんな俺でも、こいつらと一緒になら何か違うことができるのではないか？

多分それは勘違いだ。自分に都合のいい錯覚だろ。それはそうだ、そうなのだけど……

たまには都合のいい想像に浸ってもいいじゃないか。

そんな風に思わないでもない。安西も、そんな俺で良かったらこれからも見ていてくれ。

俺はお前がやっぱり好きだ。だからいつかは彼女の唯一無二でいたい。

それはいつになるか……分からないけれど、まあその話はいずれ。

「もう帰るか、そろそろ帰ろう神田帰り一緒だろ」

「あ、うんちよつと待って……」

帰り支度をする俺達三人に安西が声をかけた。というか神田に声をかけた

「アズみん、少し話があるんだけど……ええと、その」

今、安西が神田に向かって片目を閉じて見せたのは……果たして気のせいだろうか。

気のせいじゃないにしても、それはどういった意味なのか。

神田が、分かったみたいの意味あり気な表情をしているのも果たして気のせいなのだろうか。

相変わらずこの二人にも強い絆は健在だった。すこし妬いたり、しなくもない。

「うん分かったよ。じゃあ悪いけど……××君は淡野さんと帰って二人っきりで……ね」

何か含みあるような言い方だな。何か企んでいるのか。最近はろくな目にあっていないからな。

「まあいいけど……じゃあ行こうか、淡野？」

「…………え？ あ、ああ…………うん」

何故かうろたえ始める彼女。さつきから変だぞお前。そんなに俺と二人きりが嫌か。だとしたら少し傷つくかもしれないが……

「じゃあな、二人とも…………神田はまた明日学校で」

「うんバイバイ」

「明日も来てね」

はいはい分かった分かった。明日も来てやるよどうせ暇だ。

そして俺達は病室を出た。淡野と二人きりで廊下を歩いた。

「…………」

「…………」

むう、なんで静かになってしまふのだろうか。淡野もしかして俺のこと嫌いなんじゃないかね？

何か悲観的な想像をしてみた。いやそうであって欲しくはないけれど、この前は…………助けて貰ったのだから、やはり…………

「淡野…………」

「何…………？」

「助かったよ……本当に」

「……別に、そんな……」

「いや、でもお前が居なかったらきつと神田は……」

取り返しのつかないことになっていただろう。そのことは俺と淡野だけの秘密だった。安西には言っていない。

それがいいと思ったからだ。それが神田の為だと、安西の为だとも思ったからだ。

知らなくてもいいこともある。悪い隠し事はしないが、良い隠し事は少し許して貰いたい。

きつと安西にも神田にも、知られたくないことの二つや三つあるはずだ。それはあいこということで……

「まあ、そうかもしれないけど」

「ああそう言えば、あの時なんで淡野まだ体育館に残ってたんだ？部活終わってただろ。後なんか目とか赤かったのはあれ何で？」

ずっと引っかかっていた疑問。

「そ、それは……」

「それは？」

「……秘密」

がくつ秘密かよ。何でだよ。どうして秘密なんだろう。

「まあいいか」

「……」

そんな感じで俺達はエレベーターホールにたどり着き、下の階へ向かうエレベーターに飛び乗る。ここは四階だ。

中には誰もいない。密室に二人きり。別に変な想像はない。

「あ、あのさ……」

「何だ？」

心なしか……彼女の顔にまた朱がさしたような、恥ずかしがっているように見えた。まるで好きな人の前で上手く話せない女の子、みたいなの。

いやまさか彼女に限ってそんな嘘嘘、嘘だ。そんなわけないだろう、はは面白い冗談だ。

エレベーターはどんどん下がる。下降する感覚が癖になりそうだ。

中々その感覚が終わらないような気がするのはどうしてだろう。不思議とその時間が長く思える。

息苦しい。そんな俺に近づいてくる彼女。ゆっくりと、ゆっくりと彼女の手が指が俺の顔に触れた。

「……淡、野」

「少しだけ……」

彼女の顔が近い。彼女の息が触れる。彼女の髪の毛からシャンプーの匂いがする。

どうしてそんな、ことをする。どうしてこんな、ことになる。

「おい……」

「好きだった……」

そう言った気がした。え？ それはどういう、ぎく、ぎくぎくぎくズブズブズブズブ。

エレベーターの到着音がやけに遠く聞こえた。……

「安西奏のいないところへ……あなたを送る。私もすぐ行くからね。少し待ってて……」

そう言って血の気の引いた俺の唇を無理矢理奪って、その鉛色の突起物で、……

俺の人生、選択肢を間違え……終了。

b a d e n d……

23 / 奏テ終ワツテ（後書き）

最後まで読んでいただいた人がいるか分からないのですけど……もし一人でもいるのなら、どうもありがとうございました。戯れ言使いです。

バッドエンド嫌いの方でしたらどうもすみませんでした。

これが私のやり方ですので、それでもいいという方はこれからもどうか戯れ言使いをよろしく願います。

なのですが諸事情により次作品及び現在連載中のもう一つの作品に關しましては、更新が遅れることになりそうです。気長に待ち続けてくれたら幸いです。

待ってくれる人が、いたらの話ですけれど……

それでは、戯れ言使いでした。またお会いできればよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4248i/>

奏デ始メテ

2010年10月9日15時58分発行